

HAKATA
博多 174

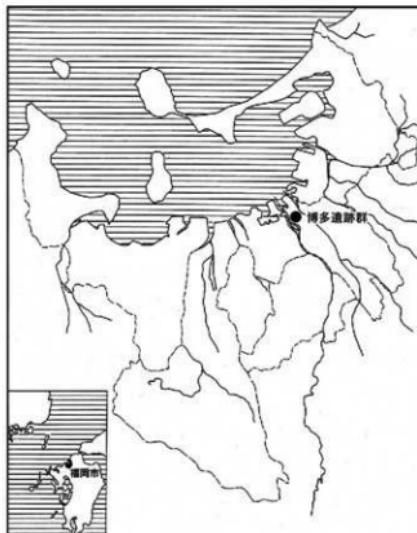
—博多遺跡群第 223 次調査報告—

2021
福岡市教育委員会

H A K A T A

博多 174

— 博多遺跡群第 223 次調査報告 —



遺跡略号 HKT-223
調査番号 1823

2021
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書はホテル建設に伴い、博多区冷泉町地内で実施した博多遺跡群第223次調査の成果を収めたものです。

今回の調査では、古墳時代初頭の土器棺墓、平安時代末期の大溝・井戸・土坑、柱穴などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、株式会社ピーロット様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書はホテル建設に伴い、福岡市博多区冷泉町地内において実施した博多遺跡群第223次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP　溝 SD　井戸 SE　土坑 SK　土器棺墓 ST　その他 SX
3. 遺構の実測は木下博文、唐尚暉、坂ノ上奈央、諸岡初音、木原亮が行った。
4. 遺物の実測は山崎龍雄、山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下が行った。
6. 製図は山崎龍雄、山崎賀代子、木下が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
8. 中国産陶磁器の分類は、以下の文献によった。
太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府の文化財第49集 2000
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は木下が行った。

調査番号 1823	遺跡略号 HKT-223	分布地図番号 049 天神
所在地 博多区冷泉町389他4筆		調査面積 465m ²
調査期間 2018.11.01 ~ 2019.04.22		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	4
第1面	4
第2面	11
土坑	11
井戸	30
溝	39
不明遺構・ピット出土遺物	45
第3面	50
土器棺墓	50
土坑	50
井戸	56
溝	62
不明遺構	63
ピット出土遺物	63
包含層出土遺物	63
3まとめ	68
図版 1～21	69～89

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1/25000)	2
図2 調査地点位置図 (S = 1/2000)	3
図3 調査区配置図 (S = 1/300)	3
図4 調査区第1面平面図 (S = 1/200)	5
図5 第1面検出遺構実測図 (S = 1/40)	7
図6 SK 01・04・08・09・12・69・72出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2、1/1)	9
図7 SK 71出土遺物実測図 (S = 1/3、1/1)	10
図8 調査区第2面平面図 (S = 1/200)	12
図9 SK 15および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3、1/2)	16
図10 SK 16および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3)	17
図11 SK 23・24・25・29および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3)	18
図12 SK 30および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3)	19
図13 SK 31・32・33・34・39・41および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3)	20
図14 SK 74および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3、1/2)	21
図15 SK 75・76・77および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3)	22

図 16	SK 78・79・85 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)	23
図 17	SK 81・82・83 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)	24
図 18	SK 84 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3)	25
図 19	SK 84 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)	26
図 20	SK 87 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/4)	27
図 21	SK 88 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)	28
図 22	SK 89 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)	29
図 23	SK 91 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3)	30
図 24	SK 91 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)	31
図 25	SK 94・95 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3)	32
図 26	SK 97・98・100・102・107 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/20, 1/3)	33
図 27	SK 105 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)	34
図 28	SE 21 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/3, 1/2)	35
図 29	SE 40 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/3, 1/2)	36
図 30	SE 42 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/2, 1/1)	37
図 31	SE 43 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/3)	38
図 32	SE 43 出土遺物実測図 (S = 1/3)	39
図 33	SE 46・35 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/3, 1/2)	40
図 34	SE 90・92・101 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/3, 1/2, 1/1)	41
図 35	SD 17 土層断面実測図 (S = 1/60)	42
図 36	SD 17 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2, 1/1)	43
図 37	SD 22 実測図 (S = 1/40)	44
図 38	SX 27 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2, 1/1)	45
図 39	第2面SP出土遺物実測図① (S = 1/3, 1/2, 1/1)	46
図 40	第2面SP出土遺物実測図② (S = 1/3, 1/2)	47
図 41	調査区第3面平面図 (S = 1/200)	48
図 42	ST 47 および出土遺物実測図 (S = 1/20, 1/6)	49
図 43	SK 51・52・58・59・61・62・63・64 実測図 (S = 1/40)	50
図 44	SK 66・67・68・110・111 実測図 (S = 1/40)	51
図 45	SK 51・53・54 出土遺物実測図 (S = 1/3)	52
図 46	SK 57・58・59 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2, 1/1)	53
図 47	SK 62・64・66・67・68・96・111 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)	54
図 48	SK 97 出土遺物実測図 (S = 1/3)	55
図 49	SE 55 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/3)	56
図 50	SD 108・109、SX 48 実測図 (S = 1/40)	57
図 51	第3面SP出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)	58
図 52	1区第1～2面包含層出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2, 1/1)	59
図 53	1区第2～3面包含層出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)	60
図 54	2区第2～3面包含層出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)	61
図 55	2区①・②第2～3面包含層出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2, 1/1)	62

図版目次

- 図版1 1区第1面全景（南西から） SK08（南東から） SK11（北西から） SD05（南東から） 2区第1面全景（西から） SK71（西から）
- 図版2 1区第2面全景（南西から） 1区第2面東半近景（北から） 1区第2面西半近景（西から） SK15（南東から） SE44、SK16（北西から） SK23（南西から） SK30（南東から）
- 図版3 SK31（北西から） SK32（北東から） SK33・34（北西から） SE46（北西から） SD17（南東から） SD17土層断面（南東から） SD22（南東から）
- 図版4 2区第2面全景（西から） 2区②第2面全景（北東から） 2区①第2面全景（北東から） SK74（南西から） SK75（北西から）
- 図版5 SK76（南西から） SK77（南東から） SK79（北西から） SK81（南東から） SK82（南西から） SK84（西から） SK88（北東から） SK89（北西から）
- 図版6 SK95底板出土状況（北西から） SK95貝出土状況（北西から） SK95下駄出土状況（北西から） SK98（北西から） SK104（北西から） SD17検出状況（北から） SE92（南東から） SE92下層半裁状況（南東から）
- 図版7 1区第3面全景（南西から） 1区第3面東半近景（北から） 1区第3面西半近景（西から） ST47検出状況（南から） ST47検出状況（西から） ST47（南から） ST47（西から）
- 図版8 ST47取り上げ後（南から） ST47取り上げ後（西から） SK53、SE40（北西から） SK41（南東から） SK51・52（南東から） SE55、SK54（北東から） SK59・60（南東から） SK58・61（東から）
- 図版9 SK62・64（南東から） SK63（北西から） SK65（北西から） SK66（北西から） SK67（北西から） SK68（北西から） SE21、SK29（南東から） SE42（北西から）
- 図版10 SE43（西から） SE43井戸側検出状況（南から） SX48（東から） 2区第3面全景（西から） 2区②第3面全景（北東から） 2区①第3面全景（北東から）
- 図版11 SK97（北東から） SK100、SE101（東から） SK105（南東から） SD108（東から） SD109（南東から） SK110（南東から） SK91・111（北西から） SD107・94（北西から）
- 図版12 出土遺物1 図版13 出土遺物2 図版14 出土遺物3 図版15 出土遺物4
- 図版16 出土遺物5 図版17 出土遺物6 図版18 出土遺物7 国版19 出土遺物8
- 図版20 出土遺物9 国版21 出土遺物10

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成30（2018）年6月21日付で、DMクリエイト株式会社一級建築士事務所より博多区冷泉町389ほか4筆地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号30-2254）。同地内は博多遺跡群の範囲内であり、平成15（2003）年9月11日、平成29（2017）年5月8日に確認調査を実施し、地表面下170cmで遺構を確認している。

今回はRC造9階建のホテル建設であり、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成30（2018）年10月下旬に現物提供により、調査範囲の矢板打ちとバックホーによる表土の動取り・場外搬出を行った後、11月1日に機材搬入、以降人力による遺構の検出・掘削に着手した。11月5日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測・写真撮影を進め、平成31（2019）年4月22日に終了した。

なお調査範囲は基礎工事が行われる建築物の範囲であり、それ以外については埋蔵文化財が現状保存されている。

2 調査体制

調査委託 株式会社ビーロット

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 平成30・31年度 資料整理 平成31年・令和元～2年度）

調査総括 経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長 大庭 康時（平成30年度）

菅波 正人（平成31年・令和元～2年度）

同課調査第1係長 吉武 学（平成30～31年・令和元～2年度）

庶務 文化財活用課管理調整係 松尾 智仁（平成30年度）

松原 加奈枝（平成31年・令和元～2年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 本田 浩二郎（平成30～31年・令和元～2年度）

同課事前審査係主任文化財主事 田上 勇一郎（平成30～31年・令和元～2年度）

同課事前審査係 朝岡 俊也（平成30～31年・令和元年度）

山本 晃平（令和2年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 木下 博文

第2章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた3列の砂丘上に展開する弥生～近世に至る複合遺跡である。3列の砂丘の内、現在の呉服町交差点付近を境に博多湾寄りを息浜（おきのはま）、内陸の2列を博多浜と呼称している。現状はJR博多駅から真っすぐ海側に向かって伸びる大博通りを中心とし、高層のマンション・ビルが立ち並ぶ中、古くからの町割りが残る区域となっている。

今回の調査地点は、遺跡の南西部、呉服町交差点から南西へ約330mの冷泉町地区に位置する。道

路を挟んで北に 220 次、東に 162 次・191 次、同区画の南東に 186 次の各調査地点が位置する。

162 次では標高 3.7 m 前後で地山の黄褐色砂層となり、この面上で弥生時代終末期の壺棺墓 1 基が検出されている。冷泉町一帯では大博通りに面する 148 次でも同時期の壺棺墓 1 基が検出されているが、散在的で数は少ない。近隣では現在の祇園町交差点付近で弥生時代中期の壺棺墓が群として確認されている。

古代に下ると、冷泉町から祇園町に至る一帯には正南北および東西方向の溝が検出されており、官衙の存在が想定されている。186 次では、8 世紀に掘られ 12 世紀後半まで存続した幅 35 m、深さ 12 m を測る東西方向で断面逆台形の大溝が検出されている。平面多角形の井戸から、官人が身に着けたベルトの飾りである銅製の巡方が出土している。

こうした古代に掘削された区画に関する遺構は、その後の中世の博多の町割りにも影響を与えており、長期にわたって存在し続けていたことが明らかとなっている。西側に那珂川を臨む現在の冷泉公園から櫛田神社に至る一帯は、かつては海が入り込んでいたことから、港の存在が想定されている。付近では港における荷下ろしに伴うとみられる中国産白磁の大量廃棄遺構や区画遺構が検出されており、「港湾城」の町割りが存在したことが指摘されている。

148 次 藏富士寛編『博多 107』福岡市埋蔵文化財調査報告書 893 集 2006

162 次 藏富士寛編『博多 117』福岡市埋蔵文化財調査報告書 947 集 2007

186 次 本田浩二郎編『博多 139』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1090 集 2010

本田浩二郎「中世博多の道路と町割り」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』海鳥社 2008

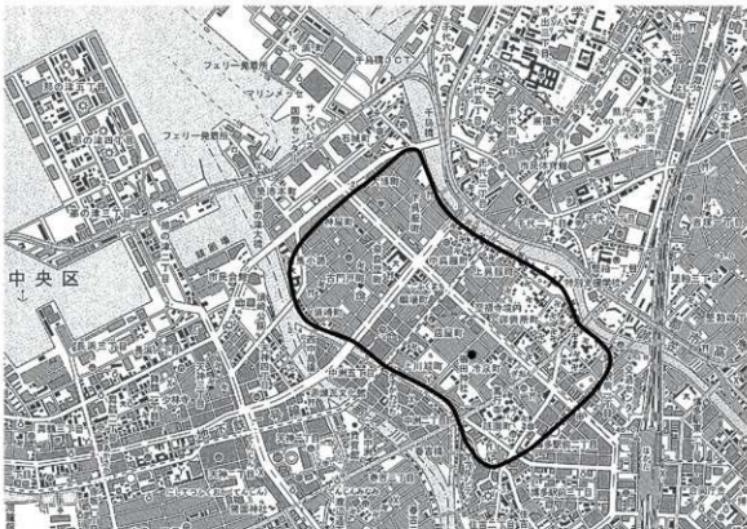


図 1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)

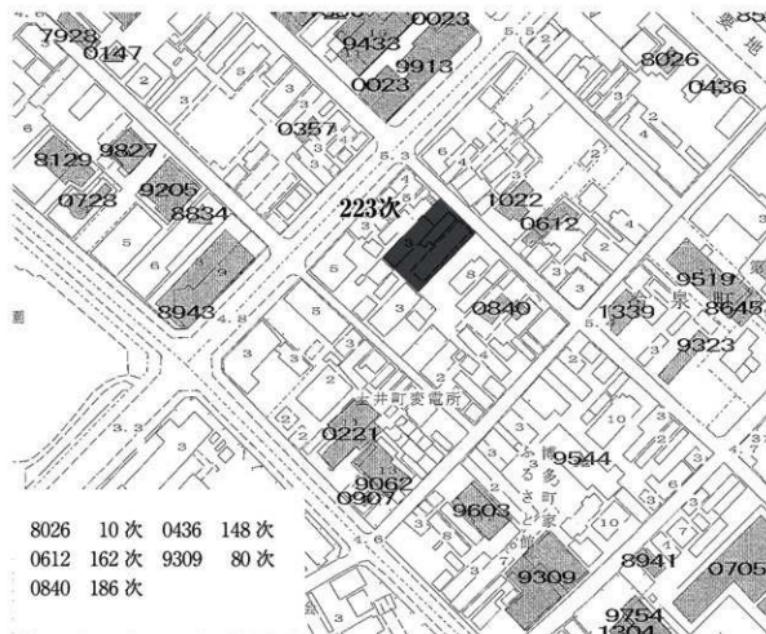


図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)

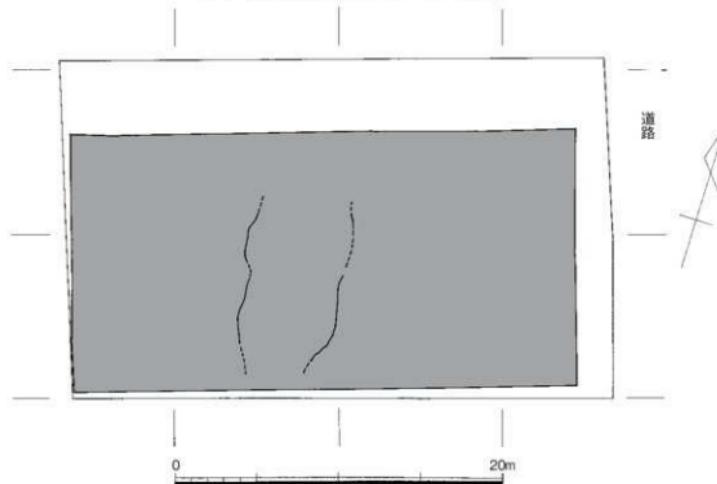


図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の南西部に位置し、現地表面の標高 5.3 ~ 5.7 m である。

排土処理のため、調査区を北側と南側に 2 分し、南側を 1 区、北側を 2 区とし、1 区より調査を開始した。なお 2 区には、計 1 m 余りの柱状改良杭からなる既存建物の基礎が東西方向に 2 列、1.5 m 弱の間隔を空けて通っている。杭列間および北側杭列と調査区北縁との間は狭長な調査区となり、排土処理には困難が予想された。そこで 2 区はさらに 3 分し、杭列のない西側 4 分の 1 を先行調査した後排土置き場とし、北側杭列と調査区北縁との間の区域を 2 区①、杭列間の区域を 2 区②として調査を進めた。また杭の下端が現地表から 4 m の深さまでしか入っていなかったこと、杭列が調査区外に延び、調査区の北東隅に H 鋼と鋼板による土留めができなかつた箇所があることから、作業上の安全を考慮し、精査・完掘をしなかつた箇所がある。さらに土留めについても、深さが事前の鏝取り面までであったため、以下の掘削時には調査区周縁に幅 1 m の走りをとり、法面をつけた結果、実質調査面積は減少している。

遺構は現地表面下 170 cm 以下で検出した。確認調査の所見に基づき、計 3 面の調査を実施した。第 1 面は灰褐色土層上面で標高 3.9 ~ 4 m、第 2 面は暗褐色砂質土層上面で標高 3.2 m、第 3 面は博多遺跡群の地山である黄白色ないし褐色砂層上面で、調査区南東隅が標高 3.17 m、北西隅が 2.25 m を測り、南東から北西へ傾斜している。出土遺物から第 1 面は近世の江戸時代、第 2 面は古代末～中世初頭の平安時代後期～鎌倉時代前期、第 3 面は古代以前、古墳時代前期～奈良時代の生活面とみられる。検出遺構は井戸・土坑・溝・ピット・土器棺墓である。出土遺物は土師器・須恵器・中国産陶磁器・銅錢・獸骨など、総量はコンテナ 119 箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

第1面

土坑

1区

SK01 (図5)

1.1 × 1.2 m の方形で、深さ 0.39 m である。

出土遺物 (図6・図版12)

1 ~ 3 は土師器皿で、1・2 は底部外面回転糸切り、3 は被熱で黒くなっている。4・5 は燈明皿で、4 は口縁端部から内面に暗褐色の鉄釉がけを施し、重ね焼きの痕跡が顕著である。5 は橙色を呈し土師質である。6 は無文鏡で、重さ 1.5 g。

SK02 (図4)

1.95 × 0.85 m の不整梢円形で、深さ 7 cm である。

SK04 (図4)

0.73 × 0.63 m の方形で、深さ 0.3 m である。

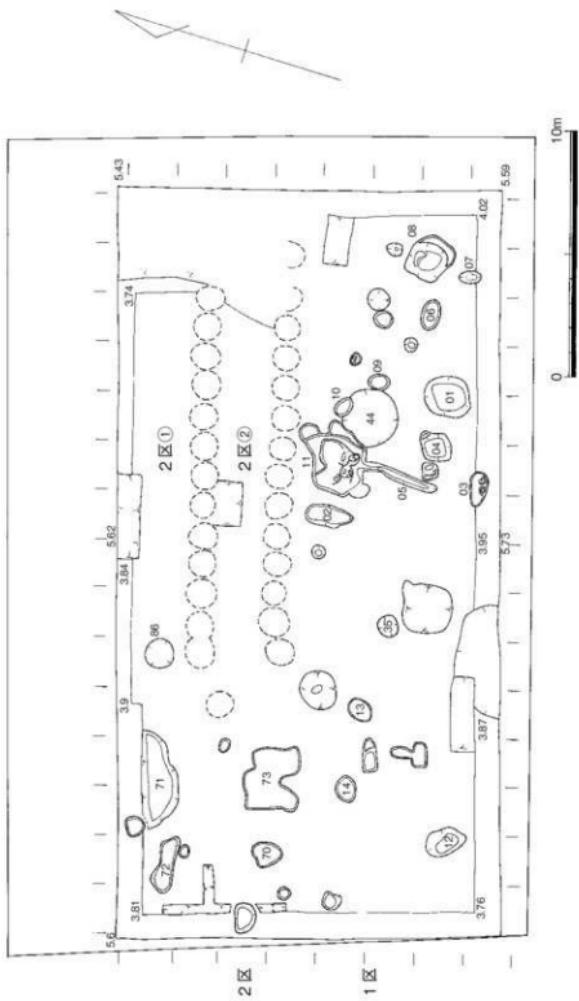


図4 調査区第1面平面図 ($S = 1 / 200$)

出土遺物（図6）

7は景德鎮窯系の中国産青花染付椀である。8は青磁碗である。壘付を除く内外面にオリーブ黄色の釉がかかる。

SK06（図4）

0.75×1.25mの楕円形で、深さ0.46mである。

SK07（図4）

0.85×0.5mの不整楕円形で、深さ0.25mである。

SK08（図5、図版1）

1.65×1.8mの隅丸方形で、深さ0.5mである。壘・底に灰白色粘土を貼っている。

出土遺物（図6）

9は丸瓦である。凸面に糸目痕、凹面に布目痕が残る。

SK09（図4）

0.8×0.65mの楕円形で、深さ0.35mである。

出土遺物（図6）

10は土師器皿で、にぶい黄橙色を呈し、底部外面回転糸切りである。11は陶器碗で、壘付を除く内外面にオリーブ黄色の釉を施し、細かい貫入がある。壘付に重ね焼きの粘土が付着する。12はが瓦質土器の鉢または盤で、外面なで調整を施し、黒くなっている。

SK10（図4）

0.55×0.8mの楕円形で、深さ6cmである。

SK11（図5、図版1）

2.6×2.1mの不整形で、深さ0.3m強である。

出土遺物（図6）

13は黒の基石で、径1.9～2.1cm。

SK12（図4）

1.05×1.5mの不整楕円形で、深さ0.34mである。

出土遺物（図6）

14は土師器の小皿で、にぶい黄色を呈し、底部外面回転糸切りである。

SK13（図4）

1.05×0.77mの楕円形で、深さ5cmである。

SK14（図4）

1.05×0.85mの楕円形で、深さ4cmである。

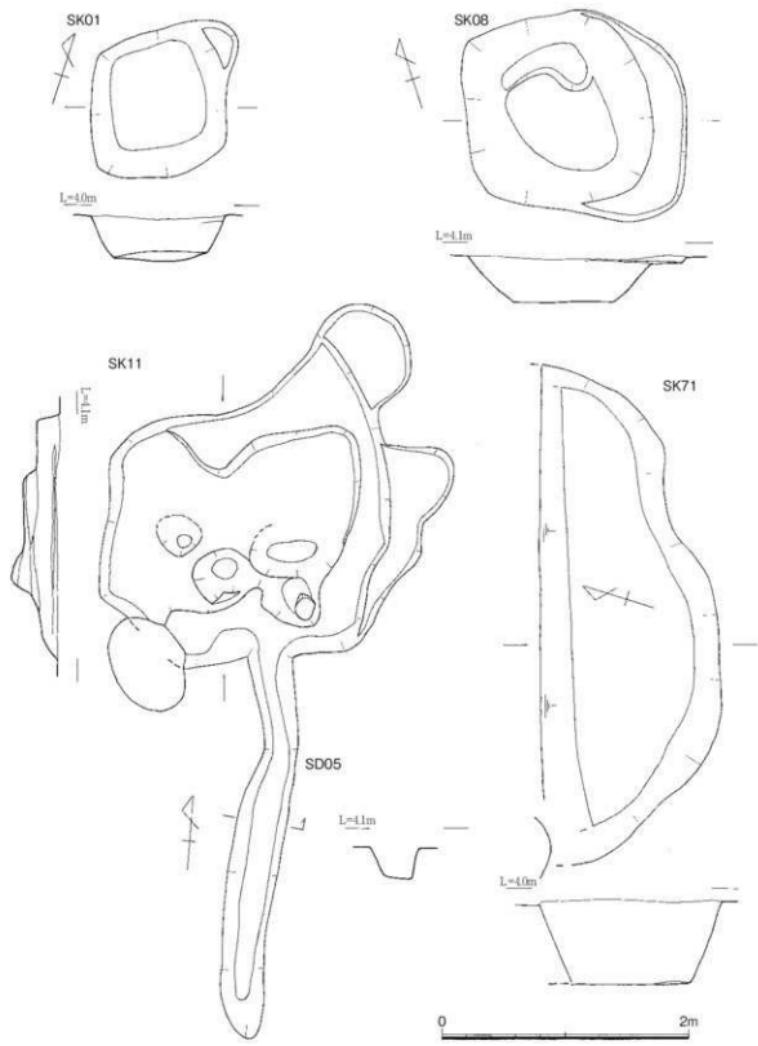


図5 第1面検出遺構実測図 ($S = 1 / 40$)

2区

SK69 (図4)

0.85 × 1.23 mの楕円形で、深さ 0.38 mである。

出土遺物 (図6)

15は土型で、馬に乗った猿を表現している。型作りで、淡橙色である。16は砂岩製の砥石片である。

SK70 (図4)

1.15 × 1.0 mの不整楕円形で、深さ 0.1 mである。

SK71 (図4、図版1)

東西 4.1 × 南北 1.2 m以上の円形で、深さ 0.7 mである。

出土遺物 (図7・図版12)

20は銅錢の元祐通寶(北宋 1086年初鑄)で、重さ 3 g。21・22は土師器の小皿である。21はぶい黄橙色、22は橙色で、いずれも底部外面回転糸切りである。23・24は白磁碗である。底部外面に23は「張」、24は不明の墨書がある。24は底部内面に輪状に釉を剥ぎ取る。25・26は瓦質土器の火舍である。内外面黒色を呈す。内面にハケ目、26は内面の底部付近と足の内側に指抑えを施し、外面に型押しの文様を施す。

SK72 (図4)

2.2 × 0.75 m以上の長楕円形で、深さ 0.8 mである。

出土遺物 (図6)

17は土師器の小皿で、淡橙色を呈し、底部外面回転糸切りである。18は黒の碁石で、径 2.1 cmである。19は滑石製のミニチュア容器で、径 2.1 cmである。

SK73 (図4)

2.5 × 2.25 mの不整形で、深さ 7 cmである。

溝

1区

SD05 (図5、図版1)

検出長 3.1 m、幅 0.4 m、深さ 0.34 mである。SK 11に取り付く。

井戸

1区

SE35 (図4)

径 0.8 ~ 0.9 mの円形の井戸側を持つ。第1面では認識できず、第2面まで面下げを行い、SD 17を掘り下げていく過程で認識した。SD 17のはば中央に掘り込まれており、掘形の範囲は明確にできなかった。SD 17の底面まで掘り込まれており、深さ 3 mである。井戸側の最下部には腐朽した木質が残っていた。近世に属するものとみられる。

出土遺物 (図33)

234は滑石製の二連容器である。235は硯の転用品か。236は白磁碗で、底部外面に墨書がある。

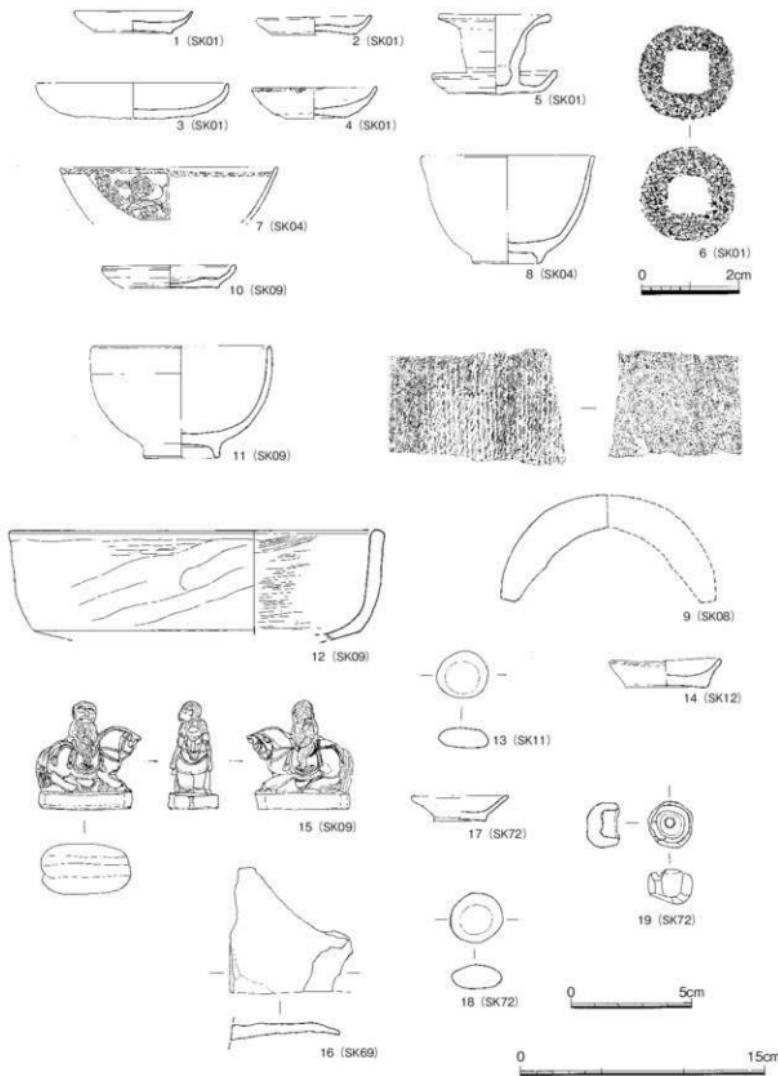


図6 SK 01・04・08・09・12・69・72 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2, 1/1)

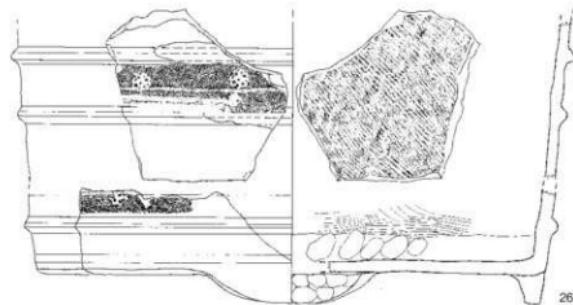
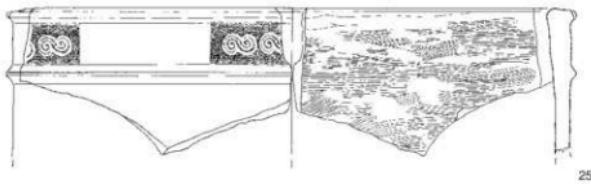
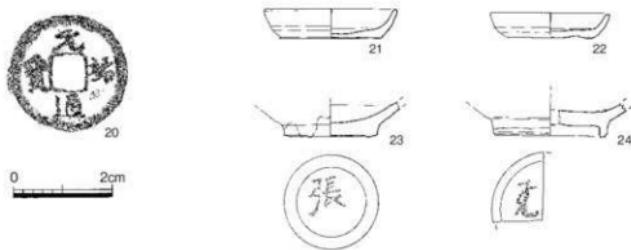


図7 SK 71出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/1$)

SE 44 (図4)

掘形は径 23 m の円形で、深さ 1.8 m 以上である。第2面 SK 16 を切る。瓦組の井戸側を持つ。近世に属す。

SE 46 (図33・図版3)

掘形は 2.7 × 2.2 m の楕円形で、深さ 2 m である。瓦組の井戸側を持つ。第2面 SE 42 を切る。近世に属す。

出土遺物（図33）

237は土師器の小皿で、灯明皿として使用しており、口縁部が煤で黒くなっている。底部外面回転糸切りである。238は石球で、径2.6～3.0cmである。239は黒の碁石で、径1.8cmである。240・241は土錘で、240は重さ12.0g、241は重さ2.5gである。242は鍔付き滑石製鍋である。243は土製品で、馬形か。

2区

SE86（図4）

2区①西端で検出した。掘形は径1.2mの円形で、深さ1.7m以上である。瓦組の井戸側を持つ。近世に属す。

第2面

土坑

1区

SK15（図9、図版2）

東西2.75m×南北0.75mの長楕円形で、深さ0.19mである。土師器皿がまとまって出土している。
出土遺物（図9、図版12）

27～43は土師器で、27～35は小皿、36～43が杯である。40は明橙色、41は浅黄色、その他にはにぶい橙色を呈す。底部外面は回転糸切りで、27・28・31～33・35・36・38～41は板状圧痕がある。42には底部に穿孔がある。44は土師器高台付き皿である。45は白磁碗で、底部内面の釉を輪状に剥ぎ取る。46は白の碁石で、径2.0～2.2cmである。

SK16（図10、図版2）

径1.8～2.0mの円形で、深さ1.1mである。第1面SE44に切られる。

出土遺物（図10、図版13）

47～51は土師器で、47は小皿、48～51が杯である。47はにぶい赤褐色、48・49はにぶい黄橙色、50はにぶい橙色、51はにぶい黄色を呈す。底部外面は回転ヘラ切りで、47・51は板状圧痕がある。52は白磁碗で、底部外面に墨書がある。53は中国産陶器鉢で、磁灶窯系I-1bである。内外面褐色の施釉がある。54は白磁皿で、底部外面に墨書がある。

SK23（図11、図版2）

径1.15～1.25mの円形で、深さ0.6mである。

出土遺物（図11）

55は白磁碗で、II-0類（11世紀後半～12世紀前半）である。

SK24（図8）

1.2以上×0.65mの楕円形で、深さ0.2mである。

出土遺物（図11）

56は土師器杯で、橙色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りの後なで調整である。

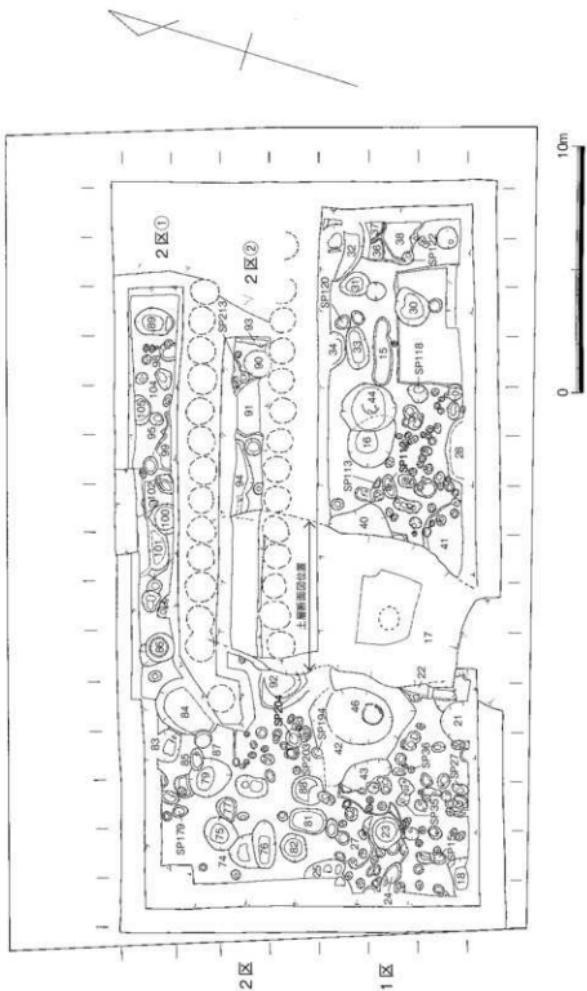


図8 調査区第2面平面図 ($S = 1 / 200$)

SK25 (図 11)

1 区北西隅で検出し、2 区にまたがる。2 区で SK 80 とつけたものと同一である。径 2 m の不整円形で、深さ 0.8 m である。

出土遺物 (図 11、図版 13)

57 は陶器長胴壺で、IV - 3 b 類(13世紀前半)である。回転ヘラ削りの後内外面に灰オリーブ色の施釉をする。疊付に焼成時の粘土塊の痕跡が残る。

SK30 (図 12、図版 2)

径 1.35 ~ 1.65 m の不整円形で、深さ 1.1 m である。

出土遺物 (図 12、図版 13)

58 ~ 66 は土師器で、58 ~ 65 は小皿、66 が杯である。59 は橙色、64 は灰オリーブ色、その他は黄色系である。底部外面は 66 のみ回転ヘラ切りで、その他は回転糸切り、63・66 は板状圧痕がある。67 は陶器小片である。68 は白磁碗で、V - 4 a 類である。69 は口禿の白磁皿で、IX 類(13世紀後半 ~ 14世紀前半)に近い。70 は白磁合子の蓋である。71 は龍泉窯系青磁碗で、I - 3 a 類(I2世紀中葉 ~ 後半)である。72 は同安窯系青磁碗で、III - 1 c 類である。

SK31 (図 13、図版 3)

0.6 × 0.5 m の楕円形で、深さ 0.5 m である。

SK32 (図 8、図版 3)

1 区東隅で検出した。径 2.7 m 以上の円形で、深さ 1 m である。

出土遺物 (図 13)

73 は土師器小皿で、にぶい橙色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りである。74・75 は白磁皿・青白磁の高台を転用した瓦玉である。

SK33 (図 13、図版 3)

1.7 × 0.85 m の楕円形で、深さ 0.38 m である。

出土遺物 (図 13、図版 13)

76 は土師器のかまど底部である。内面に粗いヘラ削り、外面に粗いハケ目を施す。77 は越州窯系青磁碗で、III - 1 b 類である。底部外面に重ね焼きの粘土が付着する。

SK34 (図 13、図版 3)

径 1.5 m の円形で、深さ 0.8 m である。

出土遺物 (図 13)

78 は陶器の小壺で、外面に濃い灰オリーブ色の施釉がある。

SK39 (図 8)

1 区東端で検出した。1.7 × 2.1 m 以上の方形で、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。

出土遺物 (図 13)

79 は土師器小皿で、橙色を呈し、底部外面は回転糸切り、板状圧痕がある。80 は白磁碗で、VI - 2 b 類である。

SK41 (図8、図版8)

径29m以上の円形の落ち込みで、深さ0.6m強である。SD17に切られる。

出土遺物 (図13、図版13)

81・82は白磁碗の高台で、底部外面に墨書がある。

2区

SK74 (図14、図版4)

1.3×1.0m以上の楕円形で、深さ0.8～0.95mである。SK76に切られる。

出土遺物 (図14)

83～86は土師器で、83は皿、84～86は杯である。83～85はにぶい橙色、86は明黄褐色を呈す。底部外面は、83・85が回転糸切りで83に板状圧痕がある。84は静止糸切りか。86は底部内外面に指抑えが顕著で、型作りの可能性がある。87は瓦器碗で、ヘラ磨きを施す。88・91は白磁碗である。89は天目碗である。高台付近を除き、黒釉を施す。90白磁皿で、VI-1a類である。92は白磁小碗の高台を転用した瓦玉である。93は陶器の盤である。口縁端部上面に重ね焼きの目跡がある。内面にオリーブ褐色の施釉がある。94は用途不明の滑石製品で、研磨調整の擦痕がある。

SK75 (図15、図版4)

径1.3mの円形で、深さ0.5mである。SK74に切られる。

SK76 (図15、図版5)

1.95×0.9mの楕円形で、深さ1.0mである。SK74を切る。

出土遺物 (図15)

95～98は土師器皿である。底部外面は回転糸切りで、98は板状圧痕らしきものがある。95は灯明皿として使用されており、口縁部に煤が付着する。99は染付小碗である。

SK77 (図8、図版5)

径0.8mの円形で、深さ0.7mである。

出土遺物 (図15、図版13)

100は須恵器杯の蓋である。101は土師器の高台付き皿である。

SK78 (図16)

0.65×0.45mの楕円形で、深さ1mである。

出土遺物 (図16、図版13)

102は土師器長胴壺である。体部外面にハケ目、指抑えがあり、煤が付着している。103は青白磁の蓋である。暗褐色の金属が付着している。104は黒の碁石で、径2.2～2.5cmである。

SK79 (図16、図版5)

1.7×1.75mの円形で、深さ0.8mである。SK85に切られる。

出土遺物 (図16)

105・106は土師器の皿・杯である。底部外面は105が回転ヘラ切り、106が回転糸切りである。107は平瓦である。凸面に繩目タタキ、凹面に布目痕がある。

SK81 (図 17、図版 5)

0.95 × 1.55 m の隅丸方形で、深さ 0.4 ~ 0.5 m である。

出土遺物 (図 17、図版 14)

110 は青磁碗で、底部外面に粘土塊が付着している。111 は青磁皿で、底部外面に「三十」を示す墨書がある。112 は黒色土器 A 梗で、内外面ヘラミガキを施す。

SK82 (図 17、図版 5)

1.0 × 1.15 m の円形で、深さ 0.3 m である。底から浮いた位置で完形の黒色土器梗が出土した。

出土遺物 (図 17、図版 14)

113 は青磁の耳付き壺である。口縁端部に重ね焼きの粘土が付着する。114 は黒色土器梗 A 類で、内面黒色でヘラミガキ、外面はにぶい黄橙色である。

SK83 (図 17)

径 1.35 m の円形で、深さ 0.85 m である。

出土遺物 (図 17、図版 14)

115 は滑石製の紡錘車か。径 5.9 cm。

SK84 (図 18、図版 5)

径 2.25 m の円形で、深さ 0.7 ~ 0.8 m である。

出土遺物 (図 18・19、図版 14・15)

116 ~ 128 は土師器で、116 ~ 122 は皿、123 ~ 128 は杯である。127 が青みのある灰白色、その他は黄色系である。底部外面はヘラ切りで、116・118・119・121・122・123・126 に板状圧痕、124・125 にコテあて状のくぼみがある。129 は青磁壺である。130 は越州窯系青磁の双層梗で、I - 3 類である。131・132 は白磁皿で、I' - 3 類である。133 は越州窯系青磁の浅形梗または皿で、III 類である。134 は白磁梗である。135 は古式土師器の二重口縁壺である。体部外面はハケ目、内面は口頭部付近に横方向の粗いハケ目と指抑え、胴部は密なヘラケズリを施す。136 は円盤状土製品である。中央部がへこみ、窯道具の焼台の一種か。137 は滑石製の鳥形か。138 は平瓦である。凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目痕を残す。

SK85 (図 16)

0.9 × 0.55 m の楕円形で、深さ 0.6 m である。SK 79 を切る。

出土遺物 (図 16、図版 14)

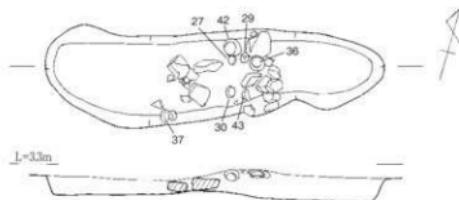
108・109 は白磁梗で、底部外面に 108 は「綱」、109 は「彭」の墨書がある。

SK87 (図 20)

径 0.6 m の円形で、深さ 0.46 m である。

出土遺物 (図 20、図版 15)

139・140 は陶器四耳壺で、VII 類である。緑灰色の施釉で、140 は口縁端部に目跡がある。141 は白磁梗で、底部内面の釉を輪状に剥ぎ取る。底部外面に墨書がある。142 は白磁梗で、IV - 1 a 類である。143 は高麗陶器の壺で、底部外面は赤褐色で焼き締められており、その他は黒灰色である。



図中番号は挿図番号と対応

0 2m



27

28

29

30

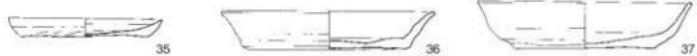


31

32

33

34



35

36

37



38

39

40

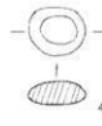


41

42



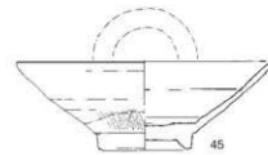
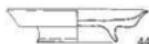
43



42

46

0 5cm



45

0

15cm

図9 SK 15および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)

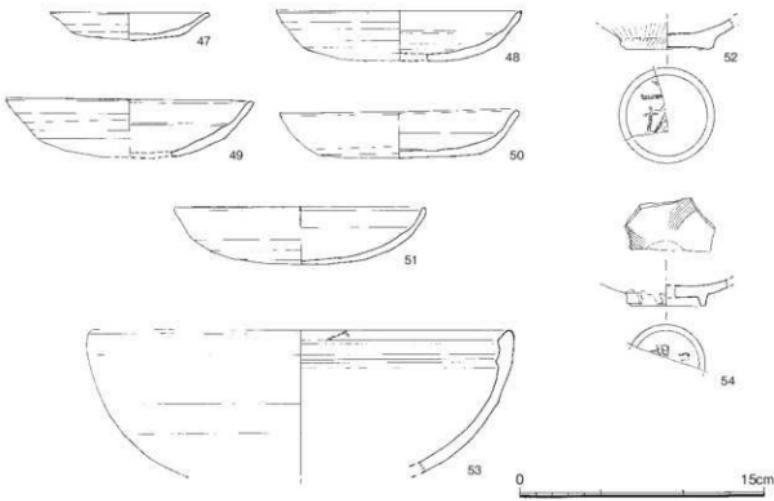
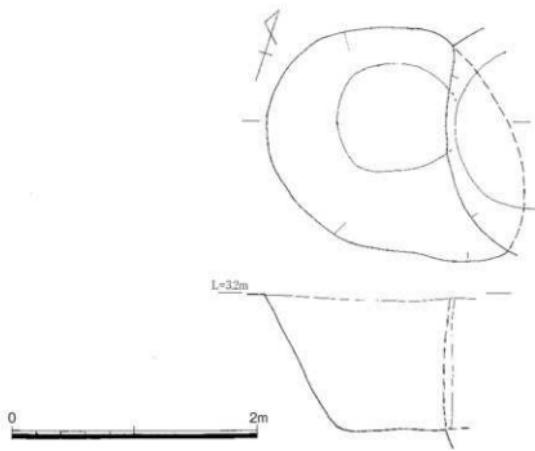


図10 SK 16 および出土遺物実測図 (S = 1 / 40, 1 / 3)

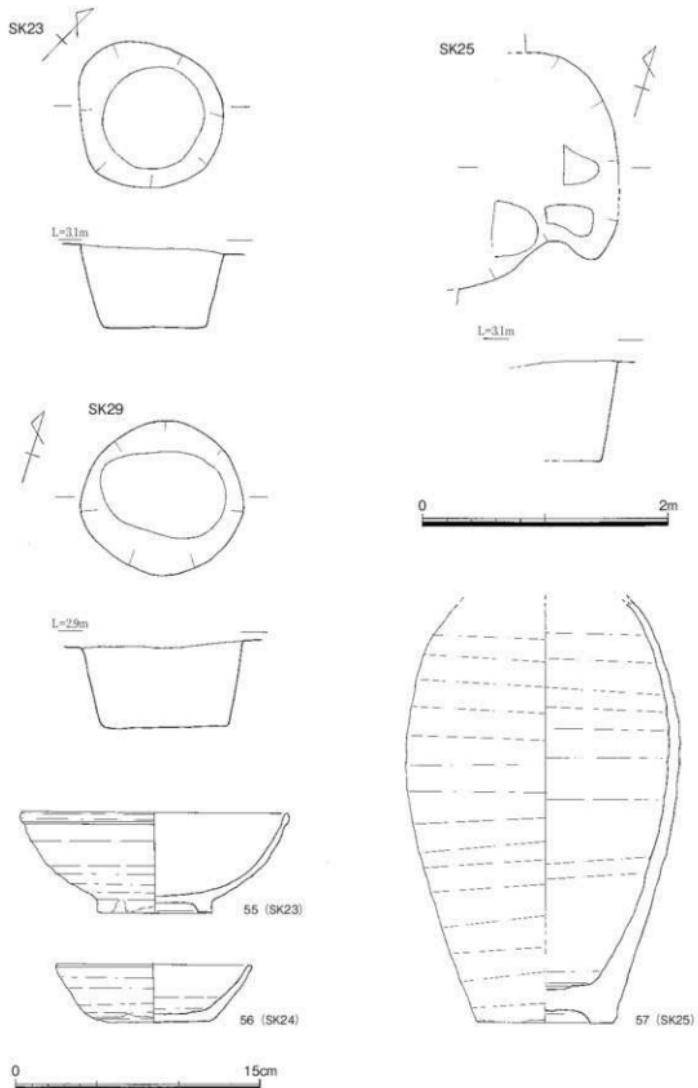


図 11 SK 23・24・25・29 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3$)

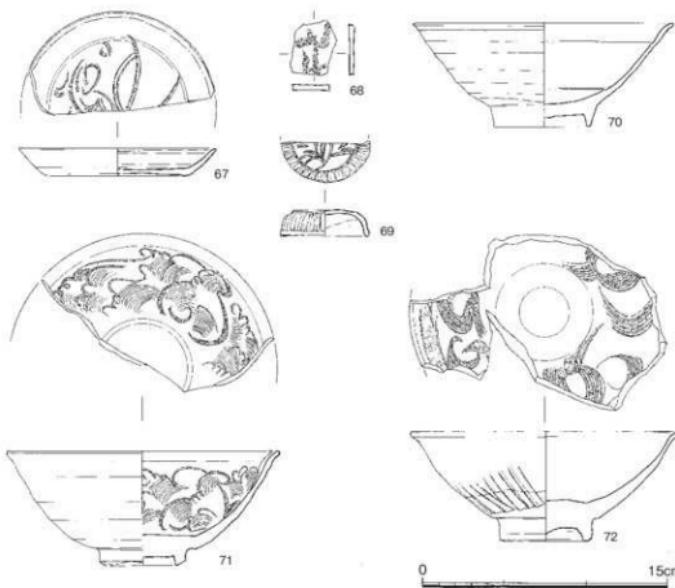
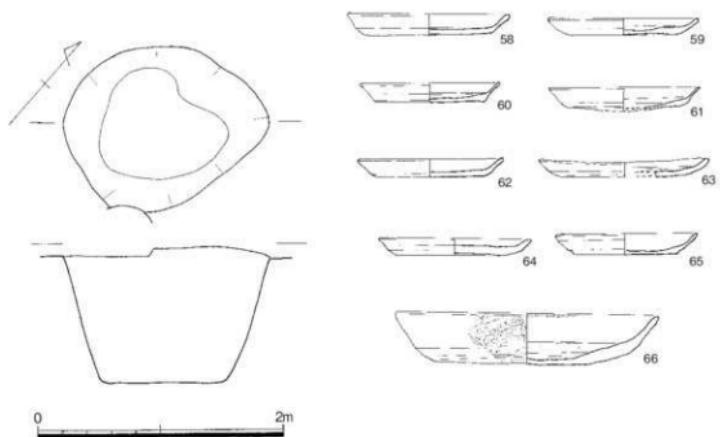


図12 SK 30 および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)

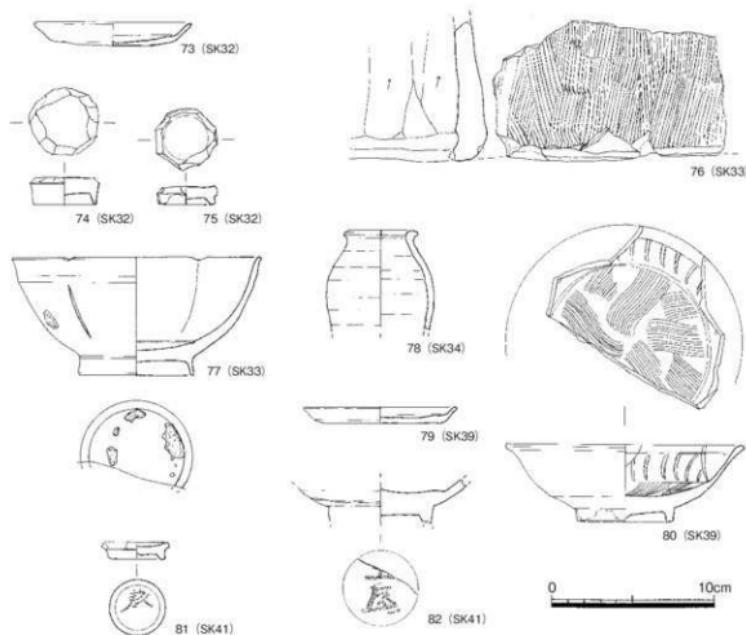
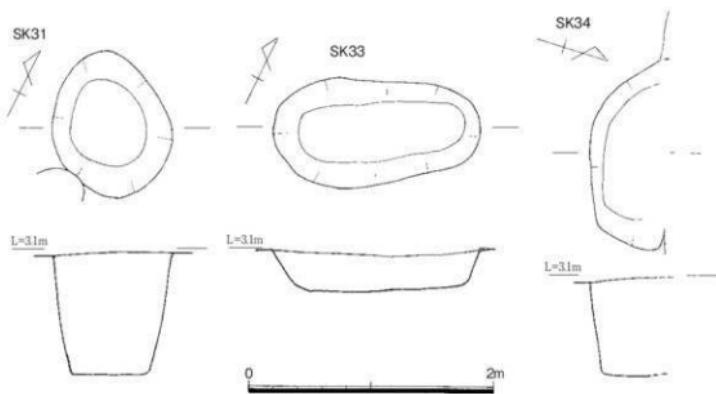


図13 SK 31・32・33・34・39・41 および出土遺物実測図 (S = 1 / 40, 1 / 3)

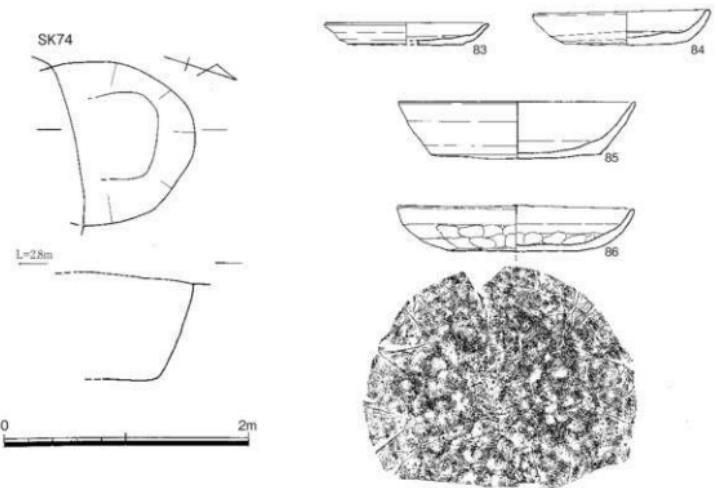


図14 SK 74 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3, 1/2$)

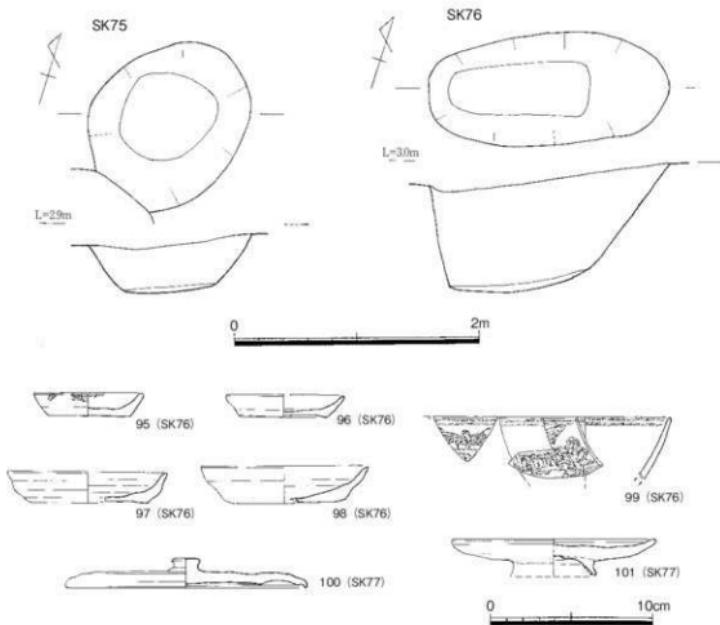


図15 SK 75・76・77 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3$)

SK 88 (図21、図版5)

径1.2mの円形で、深さ1.2mである。

出土遺物 (図21、図版15)

144～147は白磁で、144・145・147は椀、146は皿である。144は外面に縦方向の6分割ヘラ切りが入る。145はV-2 b類で、外面に縦のヘラ沈線が入る。146はI-1 b類である。148は青磁椀で、底部外面に「毛□」の墨書がある。149は青白磁合子の蓋である。150は白磁椀の高台を転用した瓦玉である。151・152は滑石製石鍋の転用品で、穿孔がある。

SK 89 (図22、図版5)

2区①東端で検出した。南北1.5m×東西1.05mの楕円形で、深さ1.2mである。

出土遺物 (図22、図版16)

153は白磁皿で、底部外面に「黄」の墨書がある。154は土師器皿で、浅黄色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りで、板状圧痕がある。155は褐釉陶器片を転用した瓦玉または賽子である。

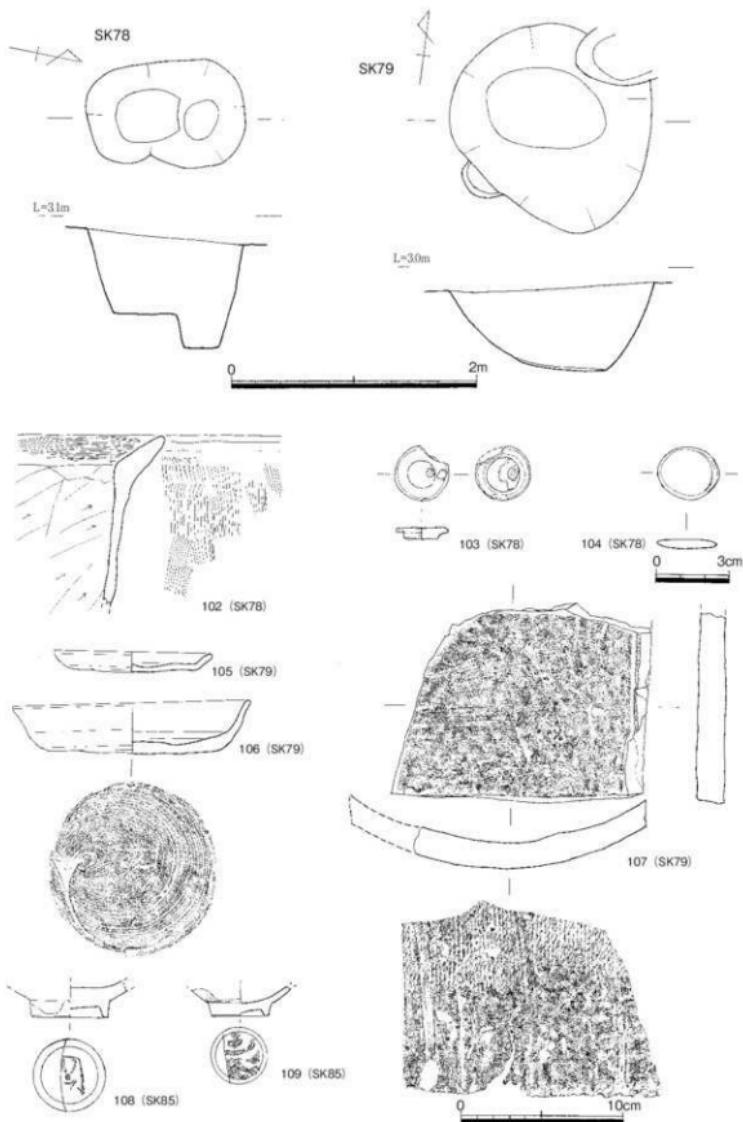


図16 SK 78・79・85 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3, 1/2$)

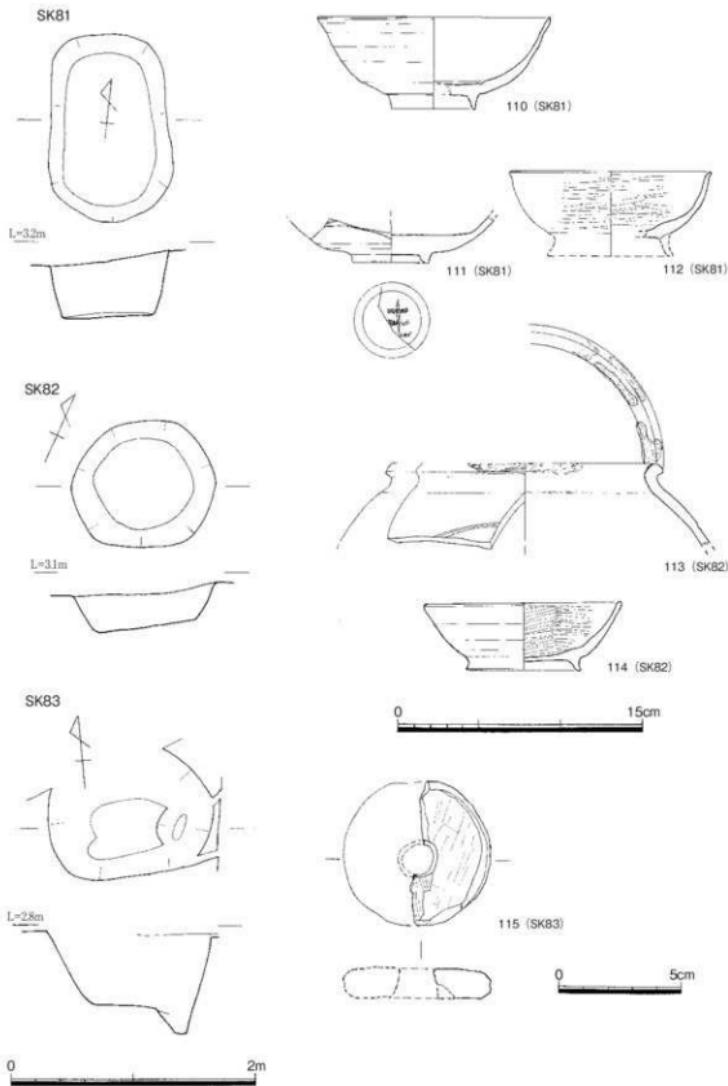


図17 SK 81・82・83 および出土遺物実測図 (S = 1 / 40, 1 / 3, 1 / 2)

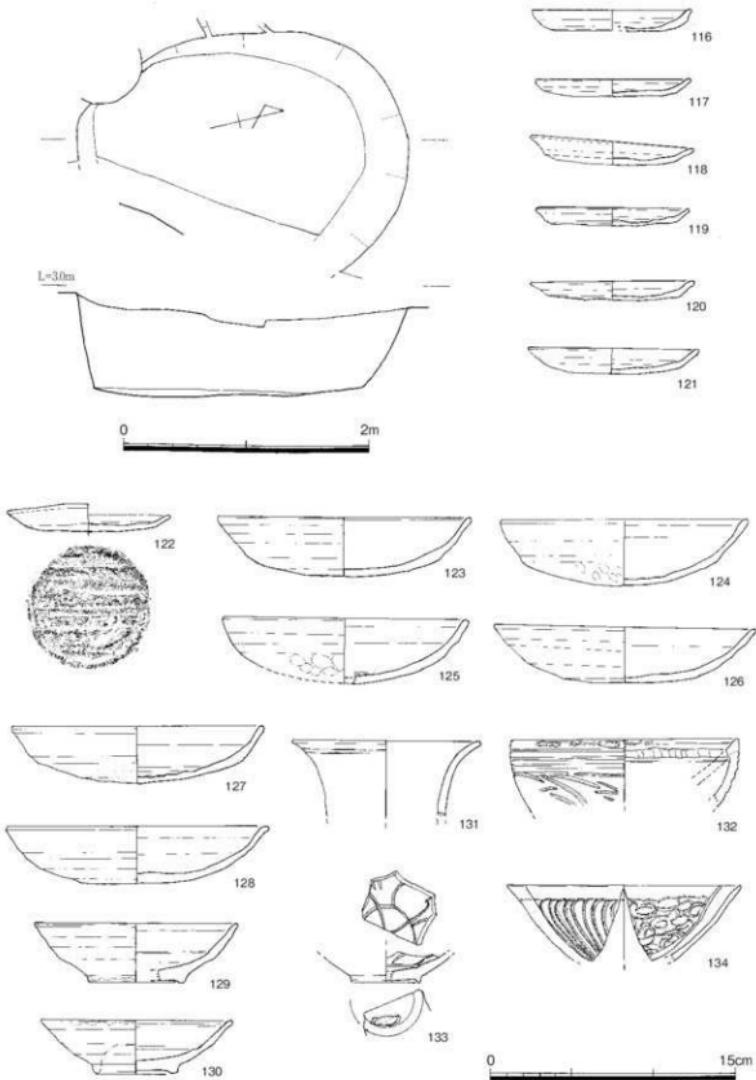


図18 SK 84 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3$)

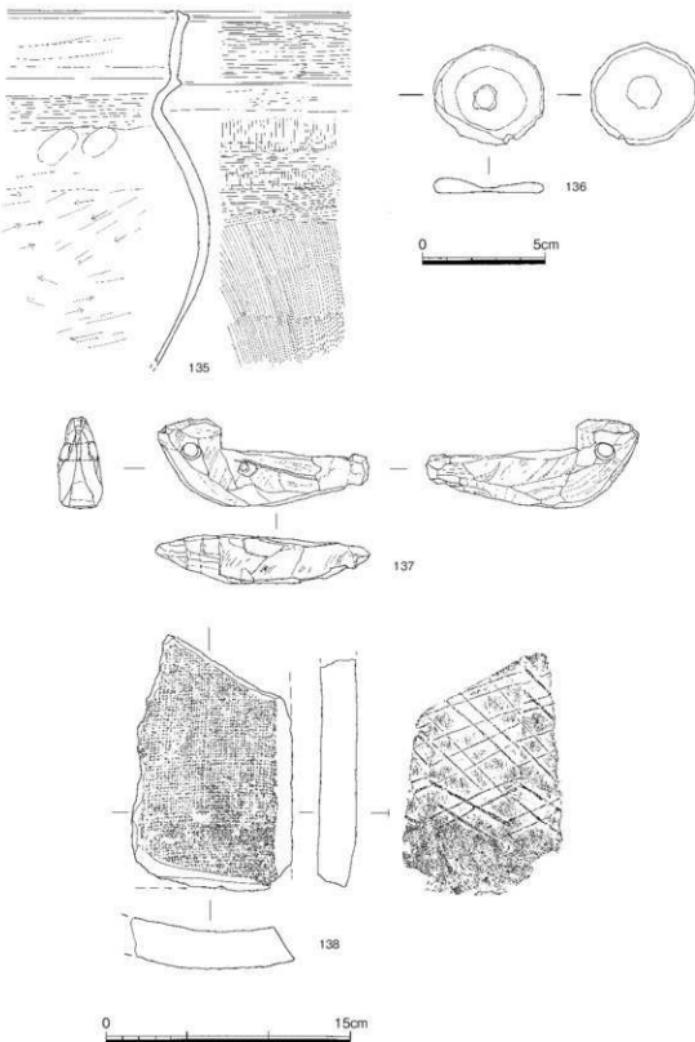


图19 SK 84 出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2$)

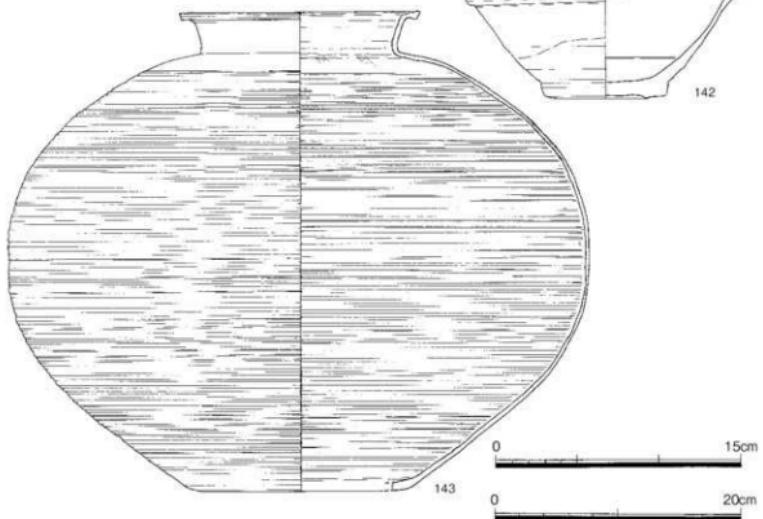
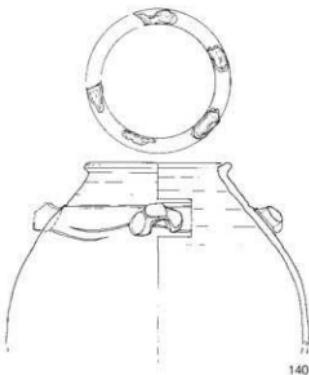
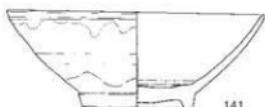
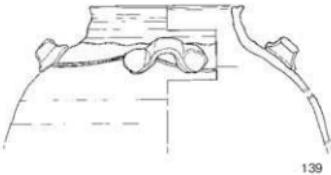
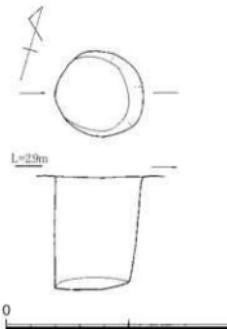


図20 SK 87 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3, 1/4$)

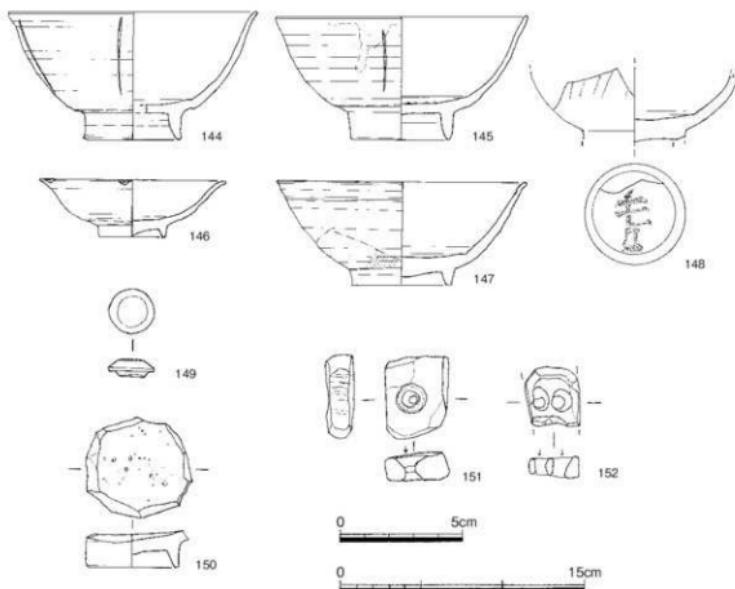
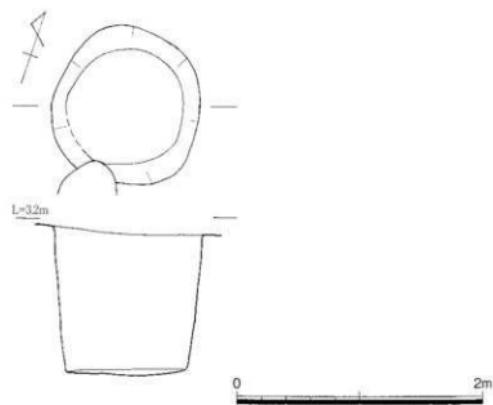


図21 SK 88 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)

156は白磁小盃である。157は白磁碗の高台を転用した瓦玉である。158は縦耳付き滑石製石鍋のミニチュアである。ケズリの後ミガキを施し丁寧に平滑に仕上げている。

SK91 (図23、図版11)

2区②東半で検出した。径2.3mの円形で、深さ1.35mである。

出土遺物 (図23・24、図版16・17)

159～165は土師器で、159～162は皿、163～165は杯である。底部外面は回転糸切りで、160・162以外は板状圧痕がある。166は土師器杯転用の円板である。底部外面は回転糸切りである。167は白磁碗で、底部内面の釉を輪状に剥ぎ取る。底部外面に「光永」の墨書がある。168は白磁碗で、底部外面に墨書がある。169は白磁皿で、底部外面に「李□」の墨書がある。170・171は白磁碗の高台を転用した瓦玉である。172は白磁碗である。173は滑石製小仏像である。残存高36cm、横幅25cm、奥行16cm。首と右腕を欠失している。右脇部に刻みがあることから、右腕も左腕同様に下げ、正面で掌を重ねる禪定印を組んだものとみられる。残存する掌の上に極小の突起があり、薬壺を表現したものとみられることから、この像は薬師如来であろう。174は用途不明の滑石製品で、石鍋片の転用である。175は磨石で、赤色顔料が付着している。176は花崗岩製の石球である。177は石製の瓦玉である。

SK93 (図8)

2区②東端で検出した。大部分が未掘範囲に広がっており、精査していない。

SK94 (図8、図版11)

2区②東半、S D 17の東側で検出した。径2.5mで、深さ0.62m以上である。作業上の安全のため完掘していない。

出土遺物 (図25、図版16)

178は白磁皿III-1類である。179は土師器杯である。淡橙色を呈し、底部外面は回転ヘラ切りで、コテあて状のくぼみがある。180は白磁碗で、底部外面に墨書がある。

SK95 (図25、図版6)

2区①東半で検出した。円形容器の底板・下駄といった木製品、貝殻が出土している。

出土遺物 (図25、図版16)

181は木製の下駄である。182は円形の木製底板である。

SK97 (図26、図版11)

径1.3mの円形で、深さ0.7mである。

SK98 (図26、図版6)

2区①東端で検出した。東西0.72m×南北0.65mの略円形で、深さ0.1mである。土師器杯2点を、底部を上にして埋置している。

出土遺物 (図26、図版16)

183・184は土師器杯である。184は底部外面回転ヘラ切りで、板状圧痕がある。

SK 99 (図8)

2区①で検出した。径1.4mの円形で、深さ0.2mである。

SK 100 (図8、図版11)

径1.2m余りの円形で、深さ0.5mである。S E 101に切られる。

出土遺物 (図26)

185は土師器皿である。底部外面は回転糸切りで、板状圧痕がある。186は白磁碗で、底部外面に墨書がある。

SK 102 (図8)

径0.7mの円形で、深さ0.3~0.4mである。

出土遺物 (図26)

187・188は土師器皿で、底部外面は回転糸切りで、188は板状圧痕がある。

SK 105 (図27、図版11)

第2面で検出していたがプランを明確にとらえられず、第3面で明瞭に検出した。東西1.2m×南北0.7m以上の円形で、検出面からの深さ1.0mである。

出土遺物 (図27、図版17)

194は土師器杯で、底部外面は回転糸切りで、板状圧痕がある。195は白磁碗で、底部内面の釉を輪状に剥ぎ取る。196は青白磁合子の身である。197は白磁皿III-1 b類である。198は白磁蓋である。199は白磁皿VI-1 a類である。200は白磁皿である。201は青磁碗I-3 a類である。202は用途不明滑石製品で、未貫通の穴が多数ある。203は滑石製鉢付き鍋のミニチュアである。204は頁岩製の砥石である。

SK 107 (図26、図版11)

2区②で検出した。第3面で明瞭に検出した。径1.2mの円形で、深さ0.3~0.4mである。S P 215に切られる。

出土遺物 (図26、図版17)

189・190は土師器で、皿・杯である。底部外面は回転ヘラ切りである。191は瓦器碗である。192は白磁碗で、底部外面に「供」の墨書がある。193は唐草文軒平瓦である。

井戸

1区

SE 21 (図28、図版9)

径1.55mの円形で、深さ1.45m以上である。半分が調査区壁にかかっており、安全上完掘していない。

出土遺物 (図28、図版17)

205~209は土師器で、205は皿、206~209は杯である。底部外面は回転ヘラ切りで、207・209以外は板状圧痕がある。210は用途不明滑石製鉢転用品である。

SE 40 (図29、図版8)

径2.35mの円形の掘形で、深さ2.36mである。S D 17に切られる。

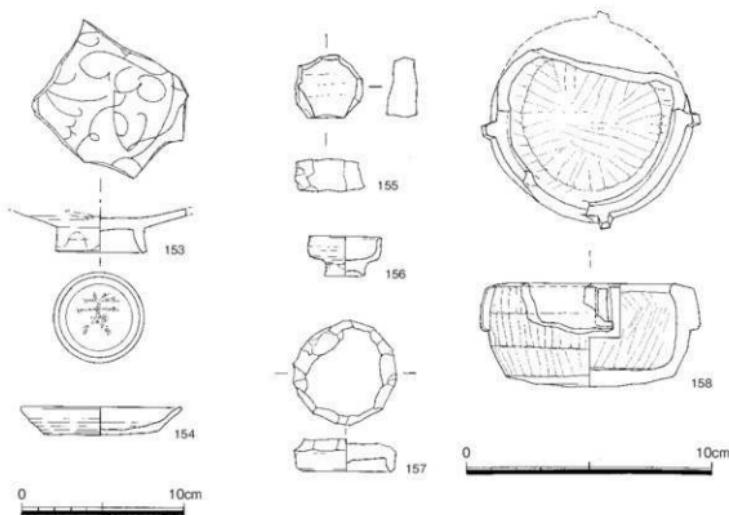
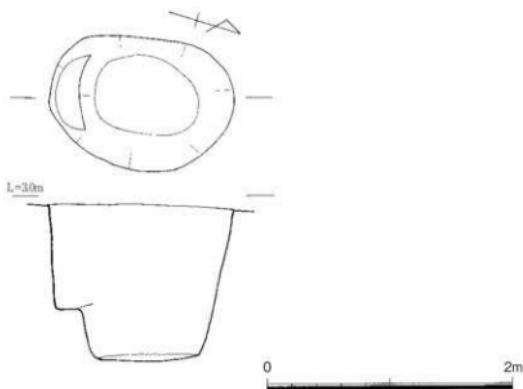


図22 SK 89 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)

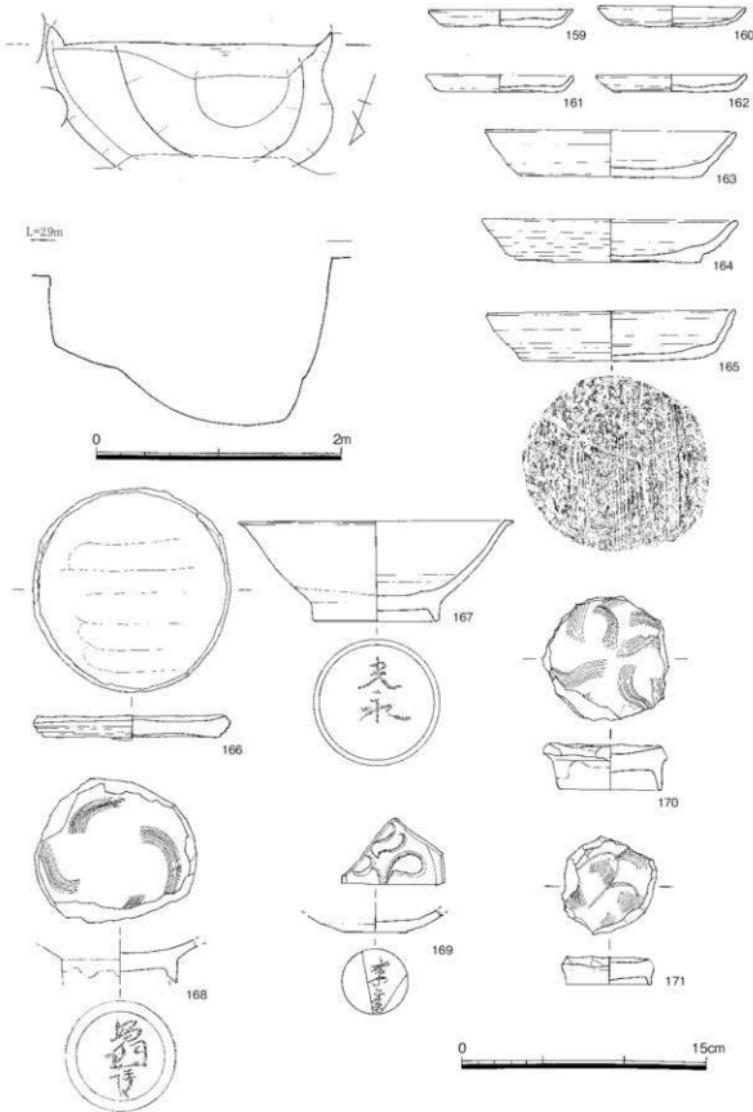


図23 SK 91 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3$)

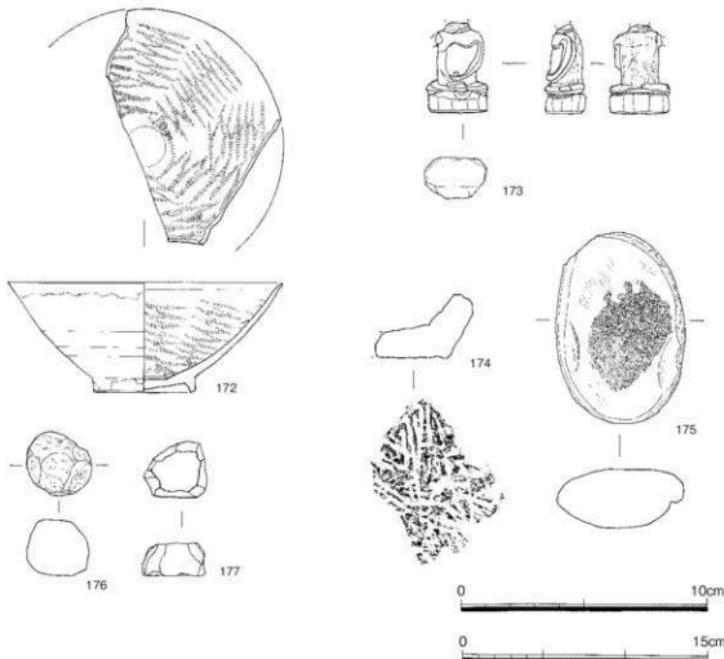


図24 S K 91出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)

出土遺物 (図29、図版17)

211～214は黒色土器B類椀である。213は底部内面、214は底部外面に線刻がある。215は褐釉把手付壺である。216は滑石製有溝鍤か。217は平瓦で、凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目痕を残す。

SE42 (図30、図版9)

4.7×4.26mの不整形の掘形で、深さ24m余である。SE46に切られ、SE43・SD17を切る。
出土遺物 (図30、図版17)

218は銅鏡の「洪武通寶」(明 1368年初鋤)で、重さ3g。219・220は土鍤である。221は用途不明の青銅製品で、平面格円形の舟形をしている。井戸枠内の出土。

SE43 (図31、図版10)

1.3×1.9mの楕円形の掘形で、深さ1.9mである。SE42に切られる。板を一辺0.6～0.7mの方形に組み、その四隅に径の小さな杭で留める型式の井戸枠、さらにその内部に径0.65mの円形井戸側痕跡が認められた。

出土遺物 (図31、図版18)

222は土師器椀である。内面はなで・ミガキ調整、外面に煤が付着している。223は陶器蓋である。外面に緑褐色釉がかかる。224は褐釉陶器水注である。225は青磁椀で、底部外面に焼成時の粘土が付着する。

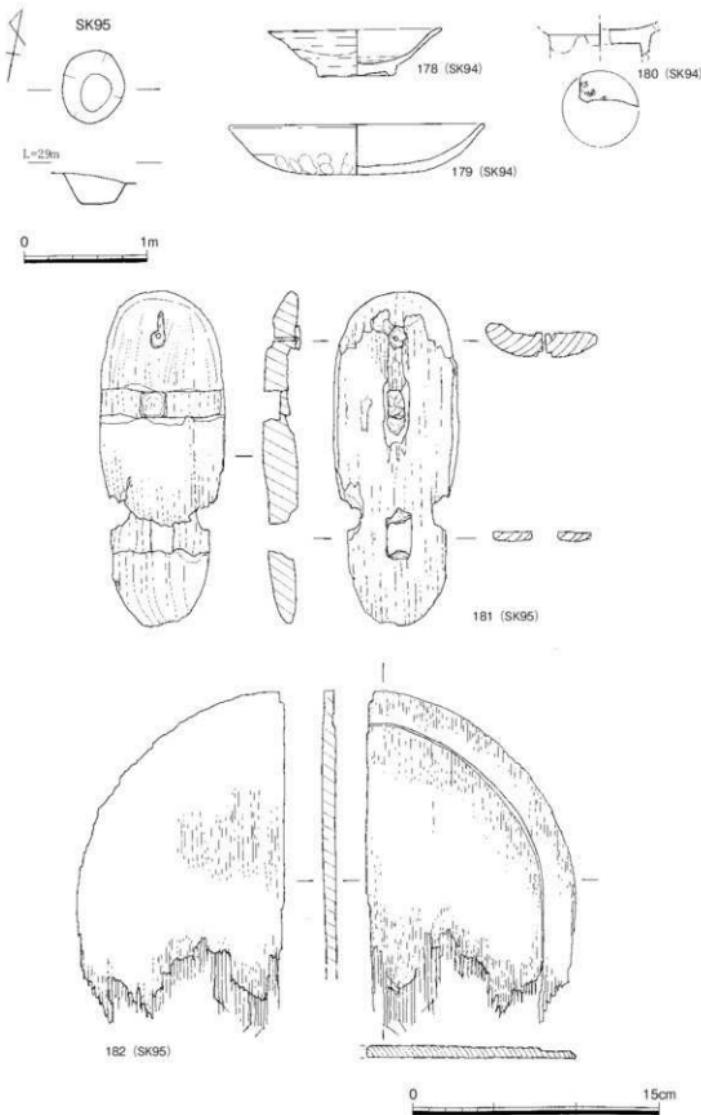


図25 SK 94・95および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3$)

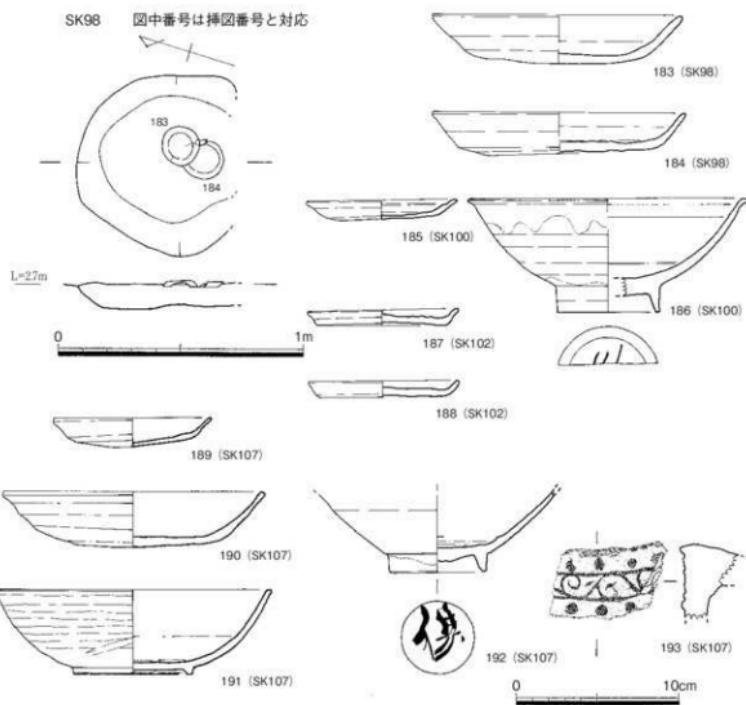
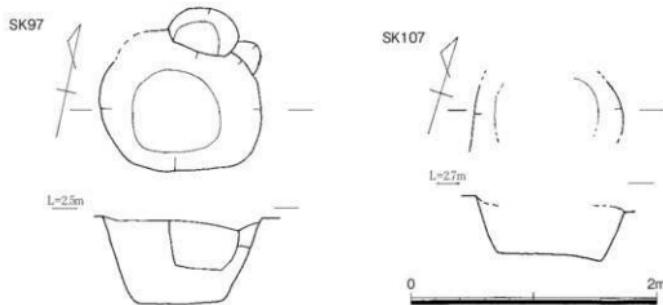


図 26 SK 97・98・100・102・107 および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/20, 1/3$)

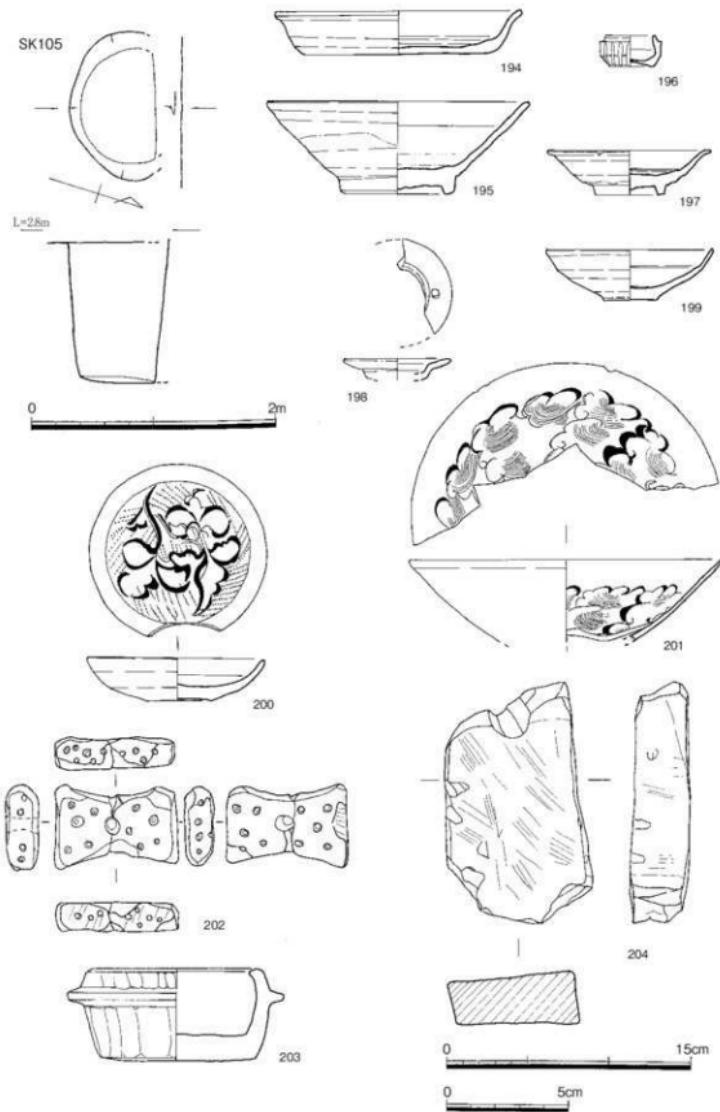


図27 SK 105 および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)

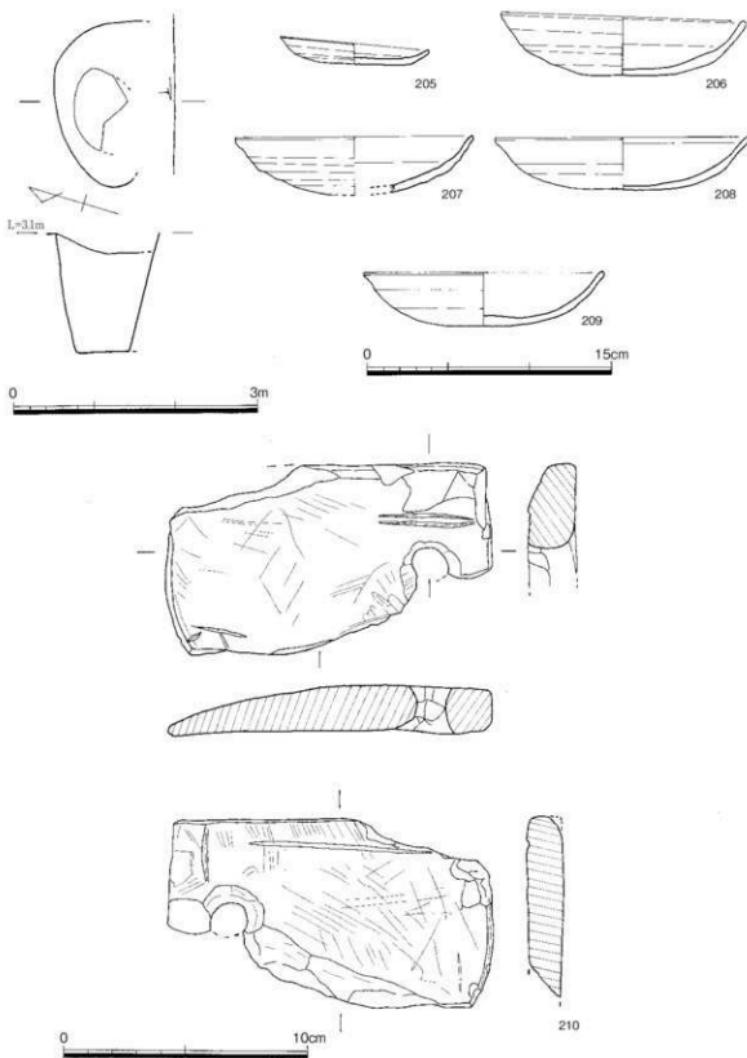


図28 S E 21 および出土遺物実測図 ($S = 1/60, 1/3, 1/2$)

1点鎖線範囲は井戸側痕跡

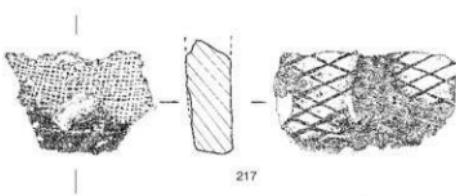
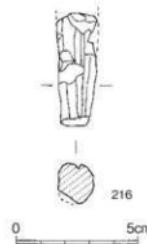
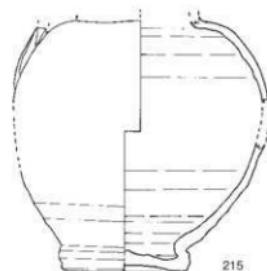
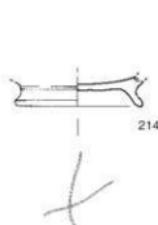
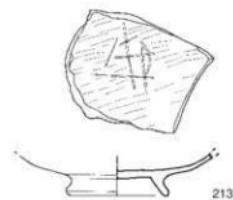
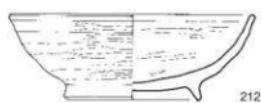
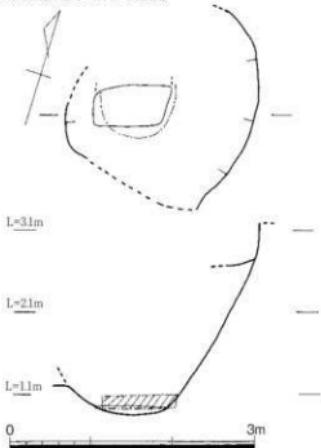


図29 SE 40 および出土遺物実測図 ($S = 1/60, 1/3, 1/2$)

226は白磁皿IV-1 b類である。227は青白磁碗である。228は白磁皿XI-7類である。229は陶器甕底部で、底部外面に十字の墨書がある。230は平瓦で、凸面に繩目タタキ痕を残す。231・232・233は丸瓦で、232・233は凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目痕を残す。

2区

SE90 (図34)

2区②東端付近で検出した。径1mの円形で、検出面からの深さ0.8mである。近世の瓦片が出土しており、瓦組井戸の井戸側部分であったものとみられる。既存建物杭の際に位置していたため、安全上完掘していない。

出土遺物 (図34、図版18)

255は銅鉄の「熙寧元寶」(北宋 1068年初鑄)で、重さ3.5g。

SE92 (図34、図版6)

南側既存杭列の西端で検出した。1.8×2.2mの楕円形掘形で、深さ1.2m余。SD 17に切られる。

出土遺物 (図34、図版18)

244は須恵器蓋である。245は白磁碗V-4 a類である。246は土師器杯で、底部外面は回転系切りで、板状圧痕がある。247は白磁片である。248は同安窯系青磁碗の高台を転用した瓦玉である。249・250は土錘である。251は草花文軒丸瓦である。252は平瓦で、凸面に繩目タタキ痕を残す。253は鉄製紡錘車である。

SE101 (図34、図版11)

最大径2.4mで、深さ1m以上である。SK 100を切る。調査区が狭く作業上の安全のため、完掘していない。

出土遺物 (図34、図版19)

254はガラス大玉で、最大径1.7cm、白色を呈す。

溝

1区

SD17 (図8・35、図版3)

調査区中央やや西寄りで検出した。幅6m、深さ2m弱で、断面形は逆台形である。SE 40・92、SK 41を切る。SE 35・42・46に切られる。延長部を2区②では検出したが、2区①では検出していない。恐らく北側杭列の真下で途切れるものとみられる。陸橋部をなした可能性がある。2区②では調査区が狭く作業上の安全のため完掘していない。そのため溝の末端部分の状況を確認できなかった。

出土遺物 (図36、図版19)

256は白磁小碗、257は白磁小皿、258は龍泉窯系青磁碗I-2 b類、259は白磁碗で、底部外面に墨書がある。260は青磁碗IV類である。261は白磁碗VII-1 b類である。262は土錘である。263は弥生土器転用品で、片面に丹塗りがある。264・265はガラス小玉で、264は濃紺色、265はライトブルーである。以上は上層の出土。

266は土師器皿で、底部外面は回転ヘラ切りである。267は白磁碗で、底部外面に墨書がある。268・269は黒の基石である。270は土師器小皿底部を転用した瓦玉である。271は平瓦片転用の瓦玉である。272は石球である。273は碾白の受皿である。274は用途不明席製品である。以上は下層の出土。

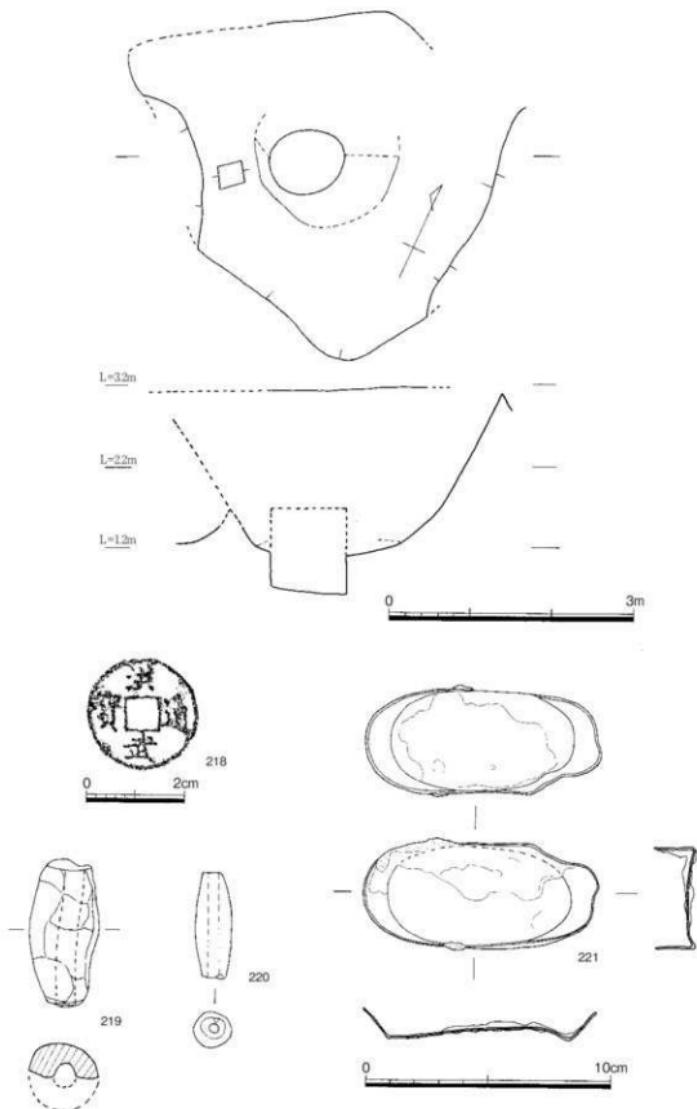
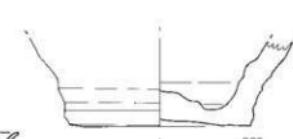
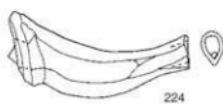
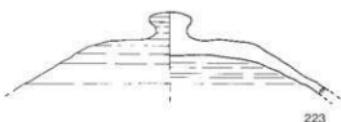
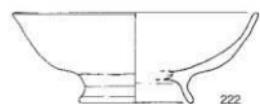
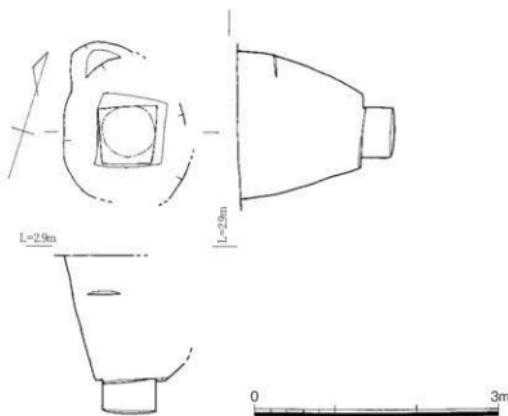
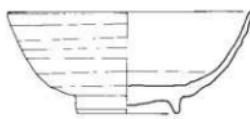


図30 S E 42 および出土遺物実測図 ($S = 1/60, 1/2, 1/1$)



226



227



229



図31 SE 43 および出土遺物実測図 ($S = 1/60, 1/3$)

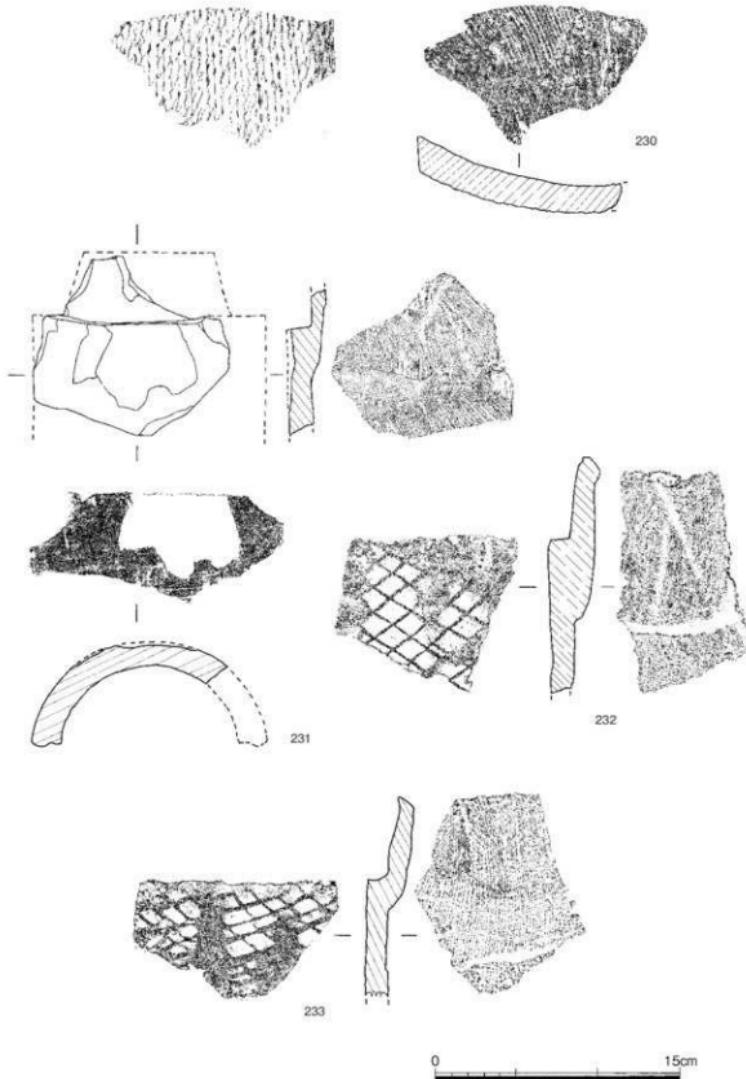


図32 S E 43 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

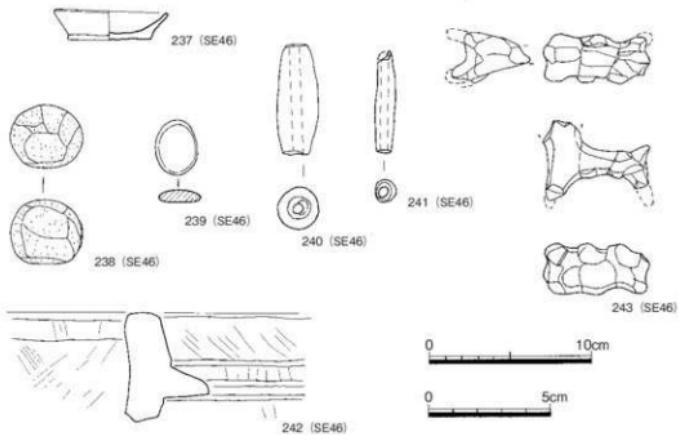
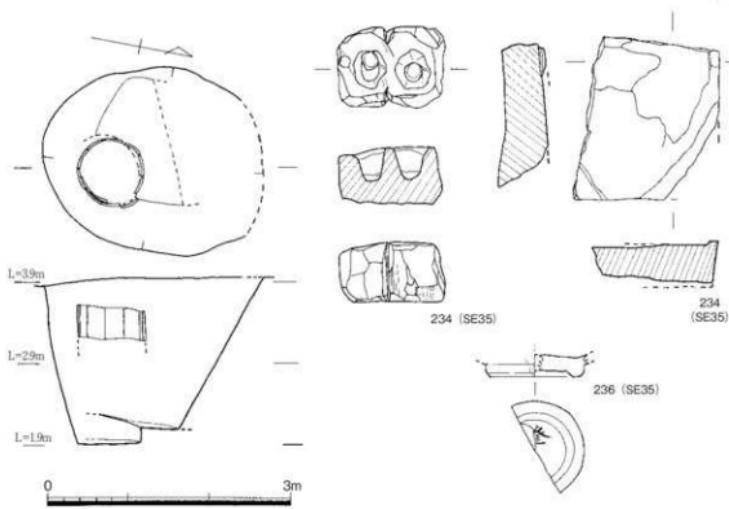


図33 S E 46・35 および出土遺物実測図 (S = 1/60, 1/3, 1/2)

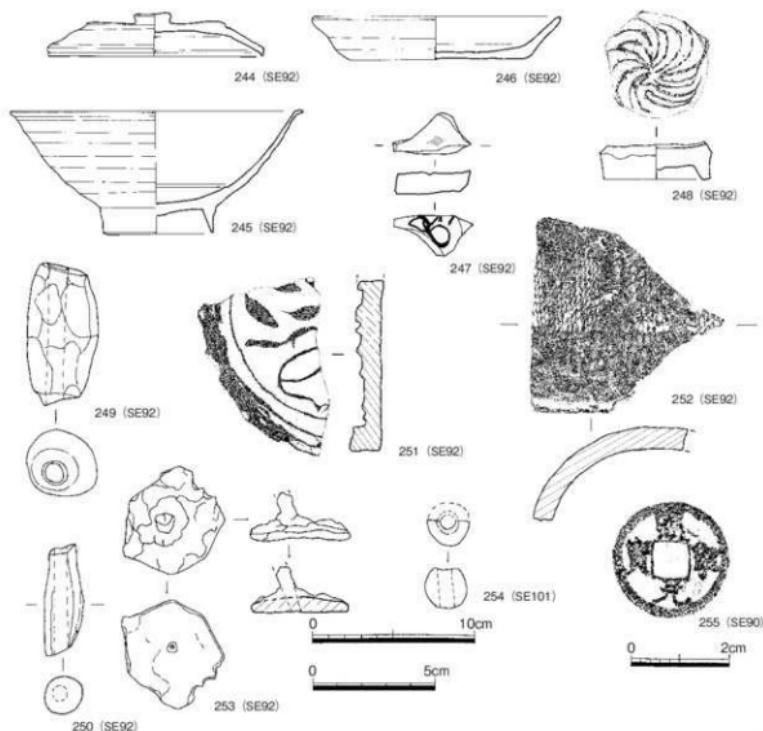
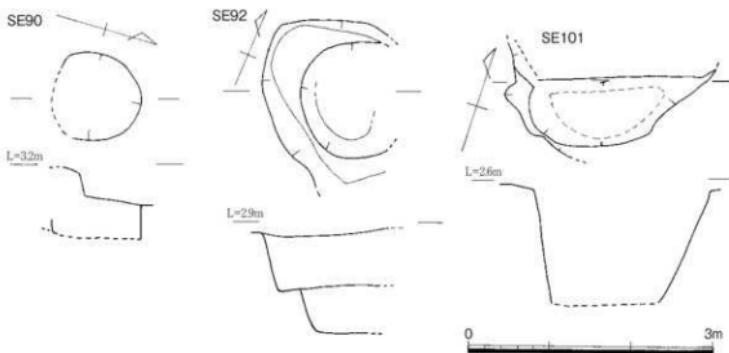


図34 S E 90・92・101 および出土遺物実測図 (S = 1 / 60, 1 / 3, 1 / 2, 1 / 1)

275は磁器のつまみで、緑灰色釉がかかる。溝の東肩の出土。

SD22 (図37、図版3)

S D 17 の南西側で検出した。検出長 2.3 m、幅 0.45 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。S D 17 に切られ、S K 29 を切る。

不明遺構

1区

SX27 (図8)

1区西端で検出した。深さ 5 cm の浅い落ち込みである。

出土遺物 (図38、図版19)

276 は銅錢の「慶暦重寶」(北宋 1045 年初鑄) で、重さ 7 g。277 は白磁碗転用の瓦玉である。278 は滑石製鍋の再加工品である。279 は石球である。280 ~ 283 は瓦片利用の賽子または瓦玉である。284 は粘板岩製の権で、重さ 19.0 g。285 は瓦玉である。

SP出土遺物 (図39・40、図版19)

1区

286 は泥岩製の砥石である。S P 15 出土。287 は白磁皿III-1 類である。S P 27 出土。288 は石製のミニチュア碗である。S P 35 出土。289 は越州窯系青磁の水注または壺である。底部外面に重ね焼きの粘土塊が付着する。S P 36 出土。290 は白磁皿である。S P 112 出土。291 はガラス玉で、径 8 mm、乳白色である。S P 113 出土。292 ~ 301 は土師器皿である。底部外面は回転糸切りで、板状圧痕がある。S P 118 出土。302 は黒色土器B類の皿である。303・304 は土師器杯で、底部外面は回転糸切りで、303 は板状圧痕がある。

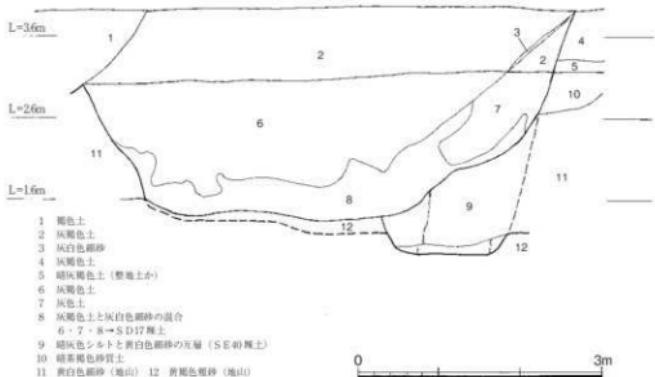


図35 SD 17 土層断面実測図 (S = 1 / 60)

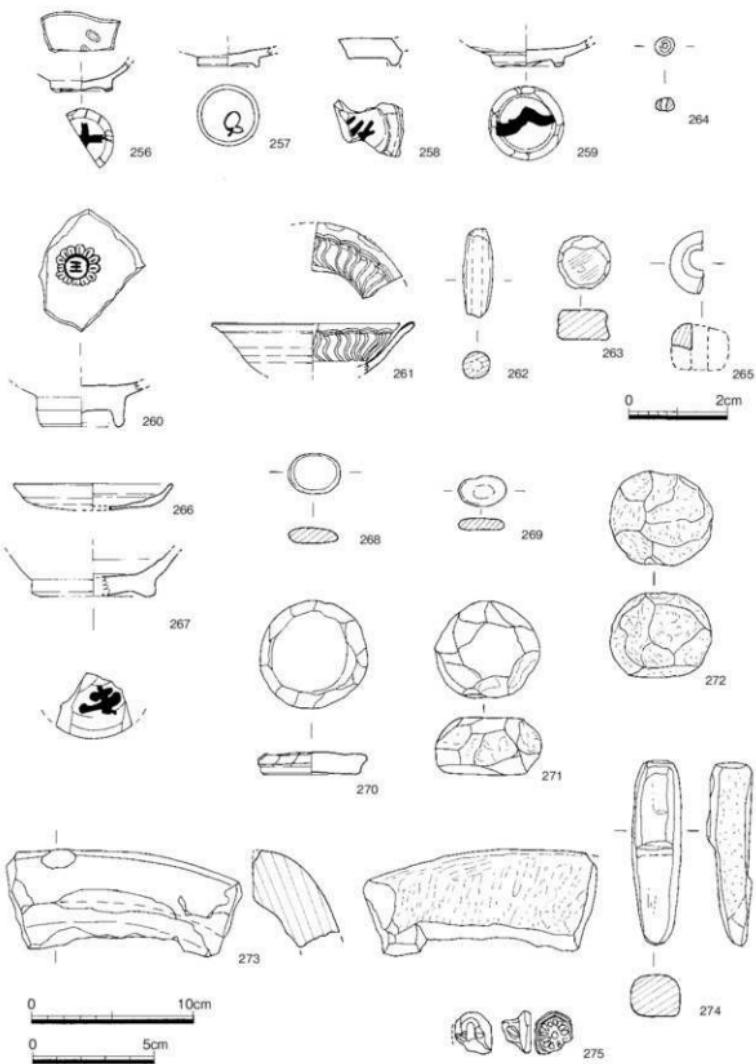


図36 SD 17出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2, 1/1)

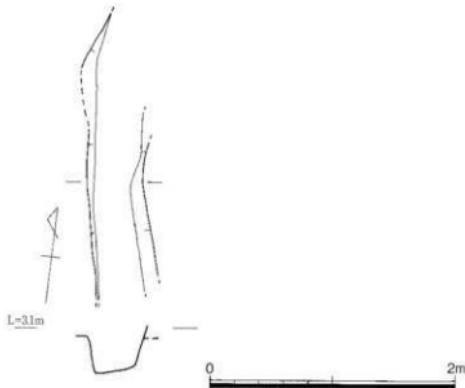


図37 SD 22 実測図 ($S = 1/40$)

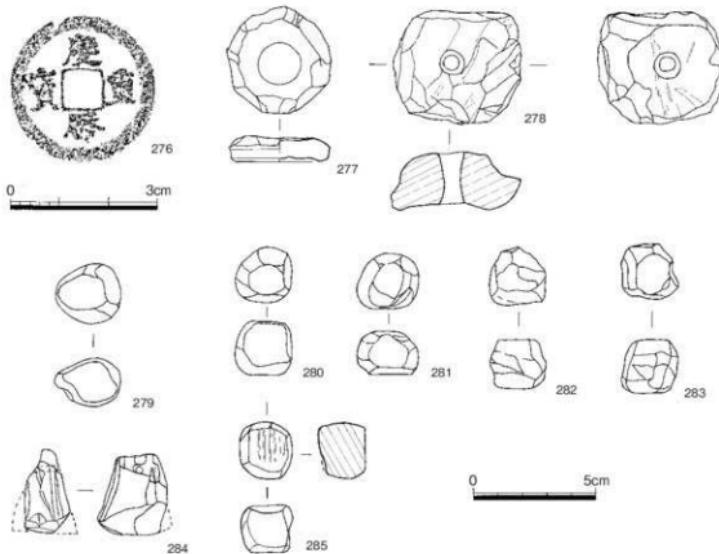


図38 SX 27 出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2, 1/1$)

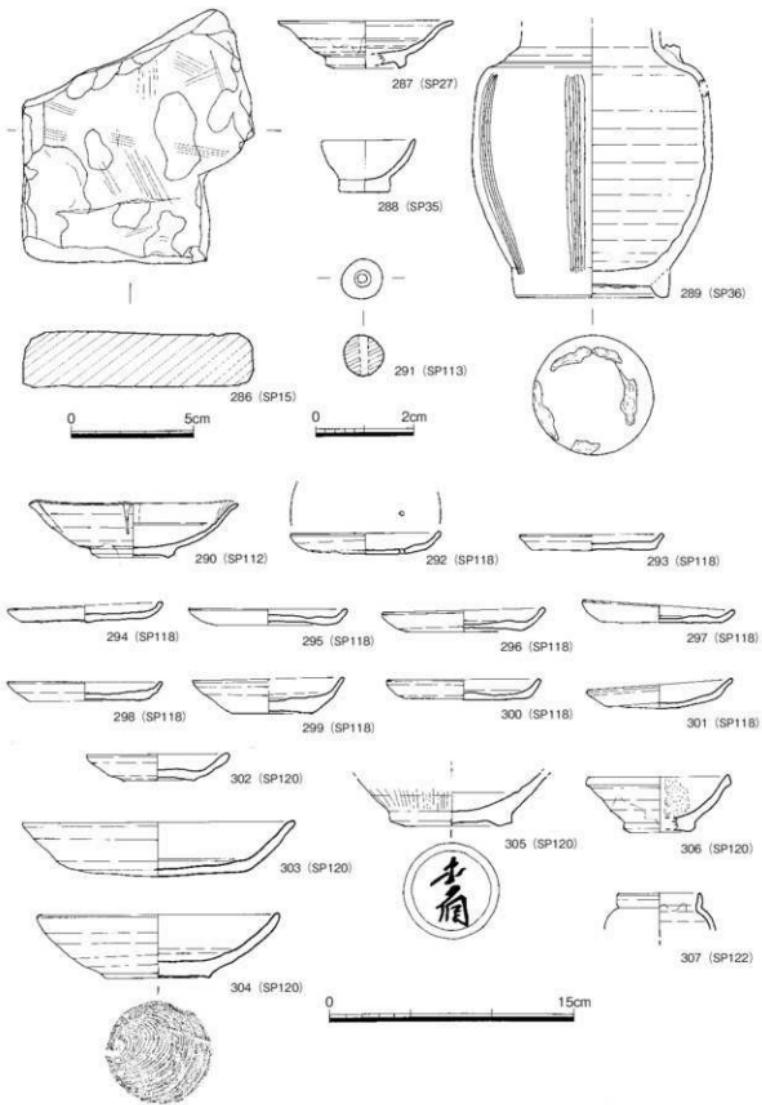


図39 第2面S P出土遺物実測図① (S = 1/3、1/2、1/1)

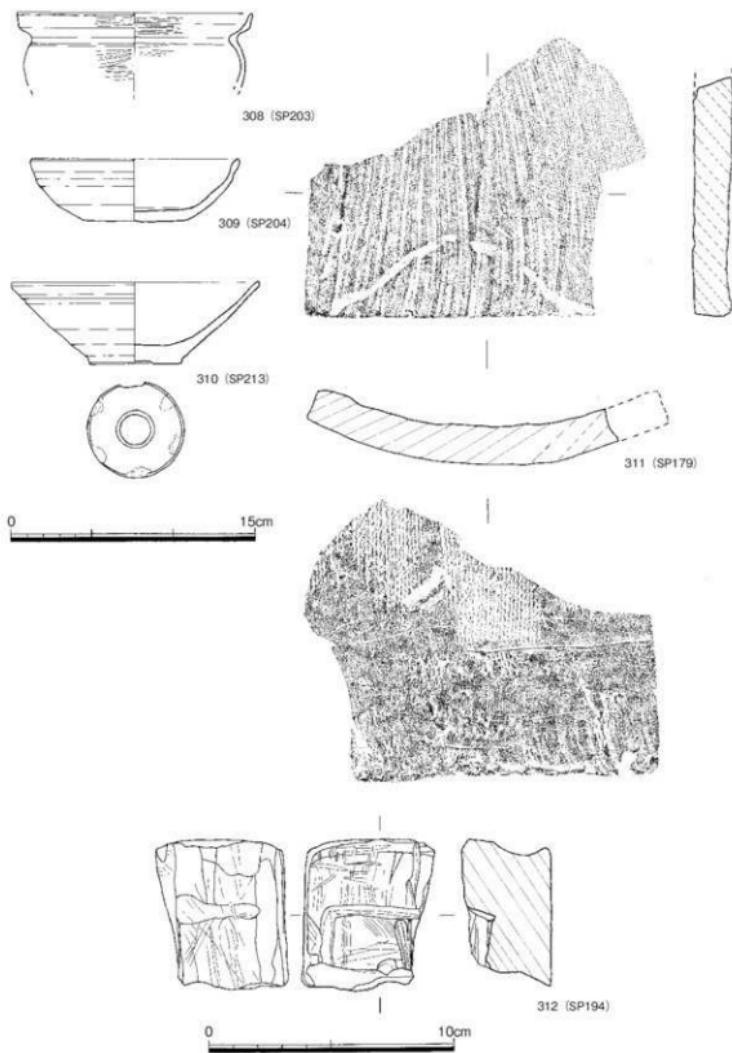


図40 第2面S P出土遺物実測図② (S = 1/3, 1/2)

305は白磁碗で、底部外面に「李綱」の墨書がある。306は磁器碗で、内面に砂が付着、火を受けている。
S P 120出土。307は褐釉陶器壺である。S P 122出土。

2区

308は吉備系古式土師器壺で、細い横方向のヘラミガキ調整である。S P 203出土。309は土師器杯で、底部外面は回転ヘラ切りである。S P 204出土。310は越州窯青磁碗で、底部外面に目跡がある。S P 213出土。311は平瓦で、凸面に繩目タタキ痕、凹面に布目痕を残す。S P 179出土。312は硯転用の砥石である。S P 194出土。

第3面

1区

土器棺墓

ST 47 (図42、図版7)

1区東半北寄りで検出した。南北方向に主軸をとり、南北0.9m×東西0.7m、深さ0.35mである。北側にやや小さい直口の壺、南側に頸部を打ち欠いた大型壺を用いている。棺の掘形は不明瞭である。北棺の直下に、打ち欠いた肩部以上のはば完全な破片を正位、すなわち口縁部端を上にした状態で埋置していた。

出土遺物 (図42、図版19)

313・314・315は古式土師器の壺である。313・314は同一個体で、総高49.7cm、口径24.5cm、胴部最大径37.0cm。底部は完全な丸底ではなく、やや尖底気味の形を残している。内外面ともにハケ目を施す。肩部で打ち割った後、胴部以下の314は土器棺墓の蓋として使用されている。肩部以上の313は315の直下に口縁部を上にして埋置していた。315は残存高57.5cm、胴部最大径53.6cm。内外面ともにハケ目を施す。頸部以上を打ち欠き、胴部中央に9×12cm大の楕円形穿孔を施している。

土坑

1区

SK 51 (図43、図版8)

第2面で遺構番号28として検出したが、第3面で二つの土坑の切り合いとみられた。径1.45mの円形で、第2面からの深さ1.3mである。S K 52を切る。

出土遺物 (図45)

316は土師器皿で、底部外面回転ヘラ切りで、板状圧痕がある。317・318は土師器碗で、318は内外面ヘラミガキ調整である。319は須恵器蓋のつまみである。

SK 52 (図43、図版8)

長径1.4m程度の楕円形か。深さ0.6mである。S K 51に切られる。

SK 53 (図41、図版8)

1.5×0.9mの不整形で、深さ0.7m弱である。S E 40に切られる。

出土遺物 (図45)

320・321は土師器杯で、底部外面ヘラ切りである。

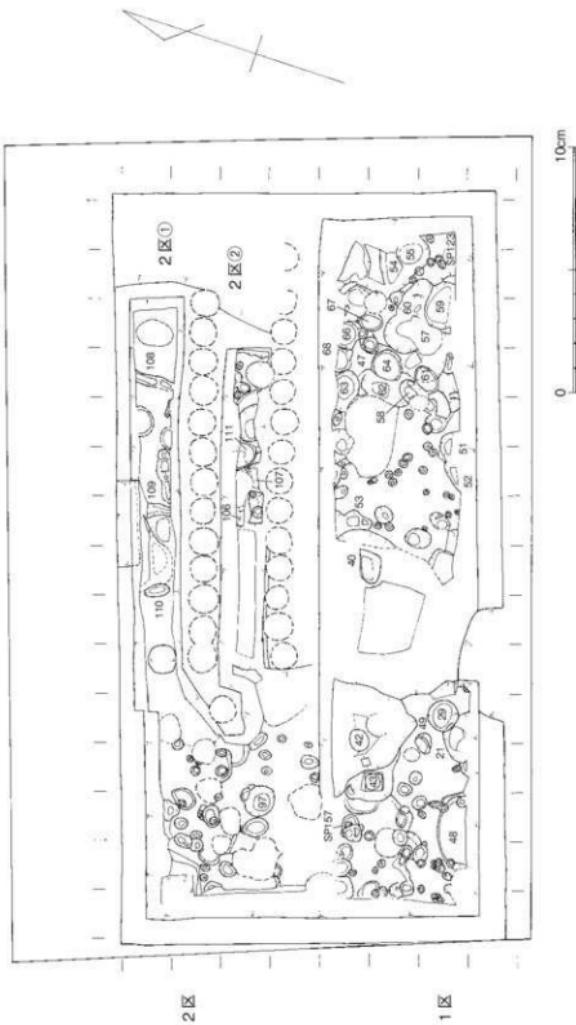
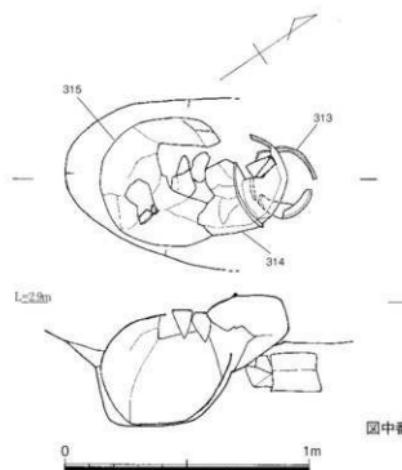


図 41 調査区第3面平面図 ($S = 1/200$)



図中番号は挿図番号と対応

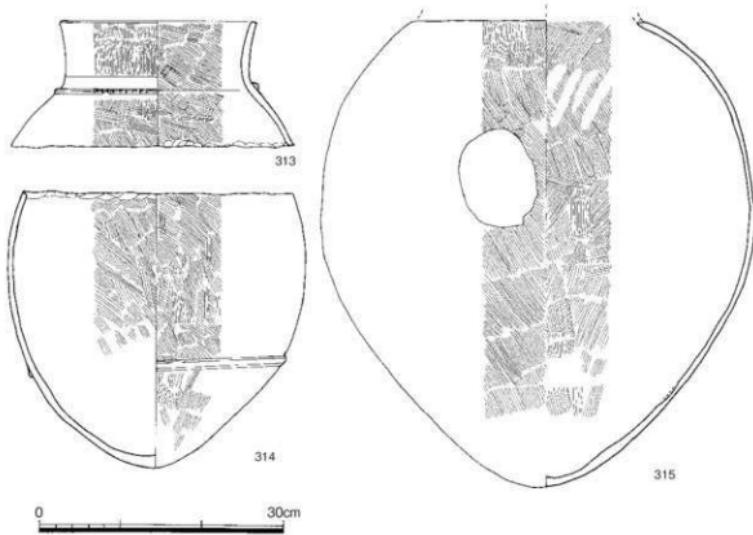


図42 ST 47 および出土遺物実測図 ($S = 1/20, 1/6$)

SK54 (図 41、図版 8)

1 区東端で検出した不整形の落ち込みで、深さ 0.8 m である。S E 55 に切られる。

出土遺物 (図 45、図版 20)

322 ~ 325 は土師器で、322・323 は皿、324・325 は杯である。底部外面は 322・325 が回転ヘラ切り、323 が回転糸切り、324 がヘラ切りで、322 ~ 324 に板状圧痕がある。326 は褐釉陶器蓋である。327 は白磁皿である。328 は天目椀、329 は白磁輪花皿で、底部外面に「呉口」の墨書がある。330 は土師器移動式かまどである。331 は平瓦で、凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目裏を残す。

SK57 (図 41)

1 区東半で検出した不整形の落ち込みで、深さ 0.9 m 弱である。

出土遺物 (図 46、図版 20)

332 ~ 336 は土師器で、332 ~ 334 は皿、335・336 は杯である。底部外面回転糸切りで、板状圧痕がある。337・338 は高麗陶器の甕で、外面暗灰・黒色、断面赤褐色である。頸部外面に三本の波状文を刻み、内面の頸部と胴部の縦ぎ目付近に格子目タタキ痕を残す。339 は須恵器か瓦転用の瓦玉または賽子である。340 は銅錢の「天聖元寶」(北宋 1023 年初鑄) か。

SK58 (図 43、図版 8)

1.4 × 0.85 m の楕円形で、深さ 0.5 m である。

出土遺物 (図 46)

341・342 は土師器皿で、底部外面回転糸切り、板状圧痕がある。

SK59 (図 43、図版 8)

1.15 × 0.7 m の楕円形で、深さ 0.5 m 余である。SK 60 を切る。

出土遺物 (図 46)

343 は白磁皿 III - 2 類である。344 は土師器杯で、底部外面回転糸切りである。345 は土師器皿底部で、穿孔がある。

SK60 (図 41、図版 8)

1.8 × 1.1 m の楕円形で、深さ 0.9 m である。SK 59 に切られる。

SK61 (図 43、図版 8)

1.15 × 0.85 m の楕円形で、深さ 0.4 m である。

SK62 (図 43、図版 9)

2.4 × 1.3 m の楕円形で、深さ 0.7 m 弱である。SK 58・64 に切られる。

出土遺物 (図 47)

346・347 は土師器皿・杯で、底部外面回転ヘラ切りで、板状圧痕がある。

SK63 (図 43、図版 9)

1.8 × 1.1 m の楕円形で、深さ 0.8 m 弱である。SK 68 に切られる。

SK64 (図43、図版9)

1.2 × 1.25 m以上の楕円形で、深さ0.6 m弱である。SK 62を切る。

出土遺物 (図47、図版20)

348～353は土師器皿である。348・349は底部外面回転ヘラ切りで、板状圧痕がある。354は窯道具か。

SK65 (図41、図版9)

1.6 × 1.1 mの楕円形で、深さ0.3 mである。

SK66 (図44、図版9)

径1.1 mの円形で、深さ0.8 m強である。

出土遺物 (図47)

355～358は土師器皿・杯で、底部外面回転糸切りで、板状圧痕がある。

SK67 (図44、図版9)

0.95 × 0.75 mの楕円形で、深さ0.4 mである。

出土遺物 (図47)

359は土製の養子である。

SK68 (図44、図版9)

径1.1 mの円形で、深さ0.8 m余である。

出土遺物 (図47)

360・361は土師器皿・杯で、360は回転ヘラ切り、361はヘラ切りとコテあて痕がある。

2区

SK96 (図41)

2区西隅で検出した。方形の落ち込みで、深さ0.15 mである。

出土遺物 (図47)

362は黒色土器A類の鉢で、内面ヘラミガキ調整である。

SK97 (図41、図版11)

1.3 × 1.15 mの円形で、深さ0.7 mである。

出土遺物 (図48)

367～370は白磁椀II-1類である。371は陶器蓋である。372は白磁浅形椀XIII-1b類である。373は褐釉陶器注口鉢である。374は丸瓦で、凸面に斜格子目タタキ痕跡、凹面に布目痕を残す。

SK100 (図41、図版11)

径1.25 mの円形で、深さ0.4～0.5 mである。SE 101に切られる。

SK110 (図44、図版11)

2区①西半で検出した。0.95 × 0.45 mの楕円形で、深さ0.3～0.4 mである。

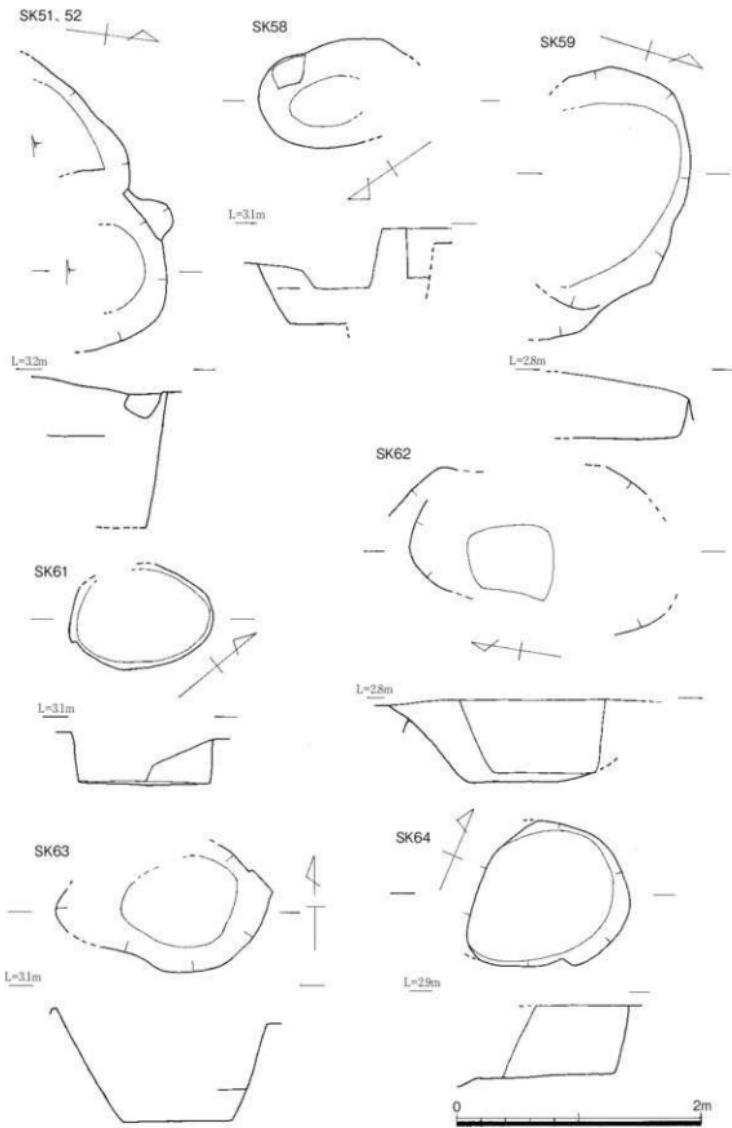


図 43 S K 51 · 52 · 58 · 59 · 61 · 62 · 63 · 64 実測図 (S = 1 / 40)

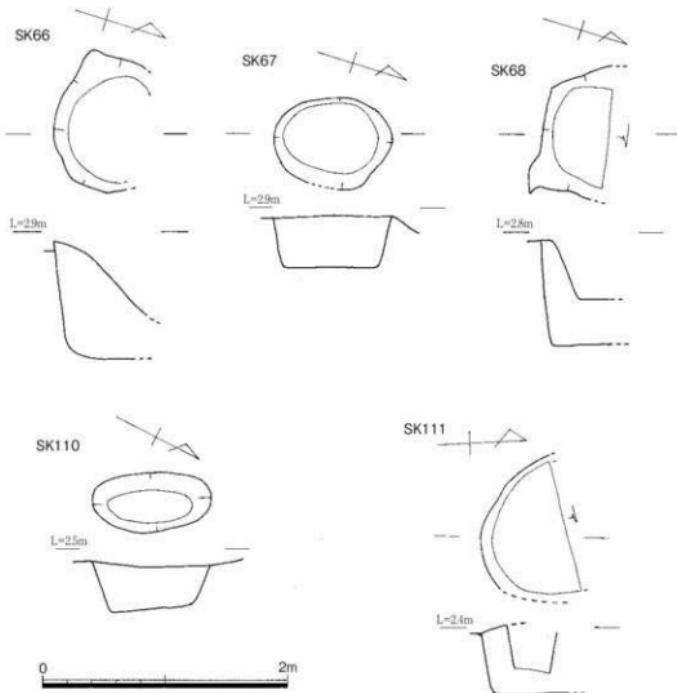


図44 SK 66・67・68・110・111実測図 ($S = 1/40$)

SK 111 (図44、図版20)

2区②で検出した。径1.14mの円形で、深さ0.56mである。SK 91に切られる。

出土遺物 (図47、図版20)

363～365は土師器皿・杯である。363・364は底部外面回転ヘラ切り、板状圧痕がある。365は底部外面指捺である。366は白磁碗で、底部外面に墨書がある。

井戸

1区

SE 55 (図49、図版8)

1区東端で検出した。径1.35m、深さ1.4mである。SK 54を切る。

出土遺物 (図49、図版20)

375は丸瓦で、凸面に斜格子目タタキ痕、凹面に布目痕を残す。376は白磁碗である。

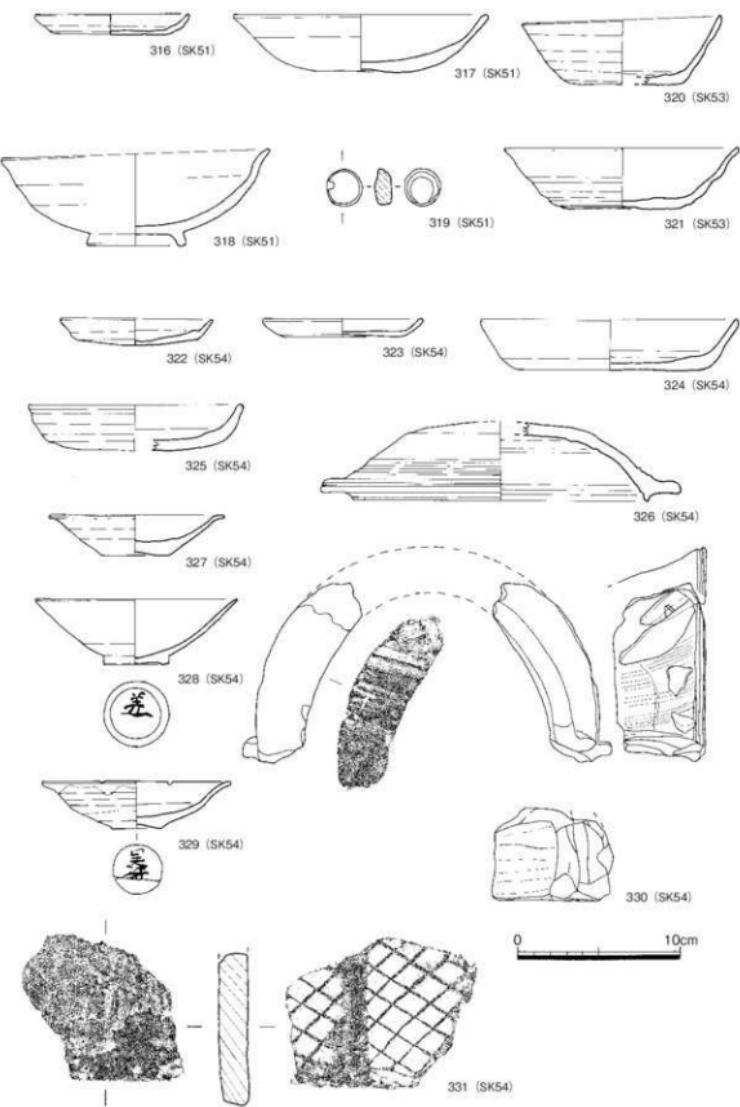


図45 S K 51・53・54 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

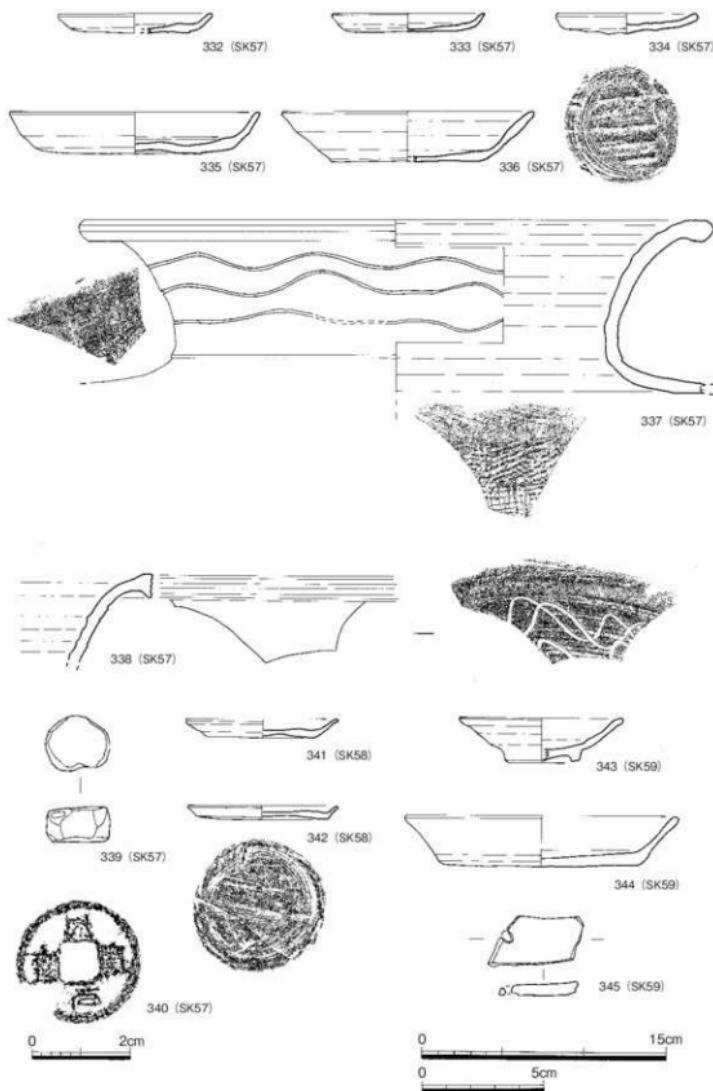


図 46 SK 57・58・59 出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2, 1/1$)

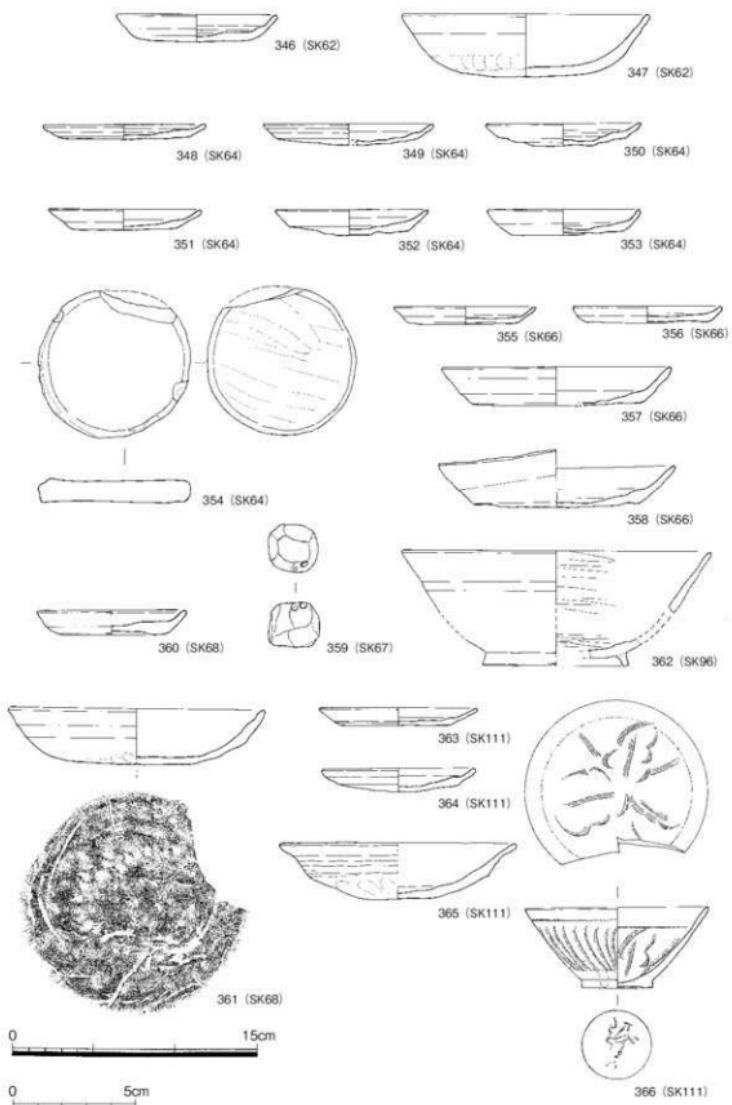


図47 SK 62・64・66・67・68・96・111 出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)

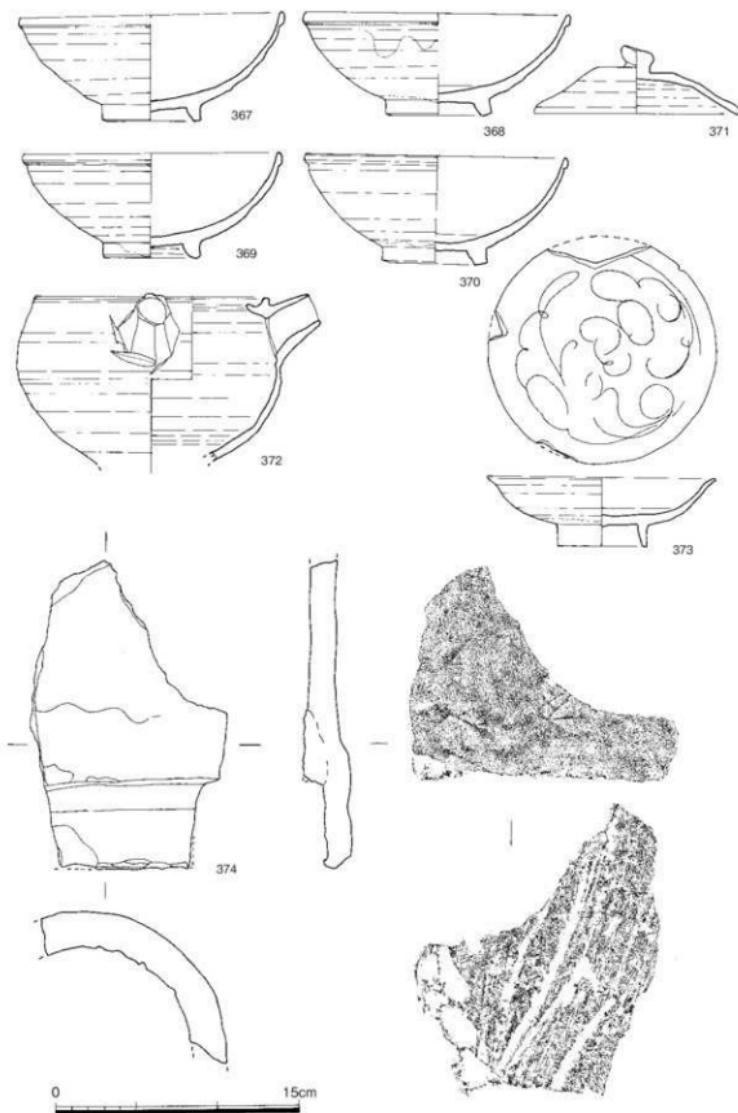


図48 SK 97出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

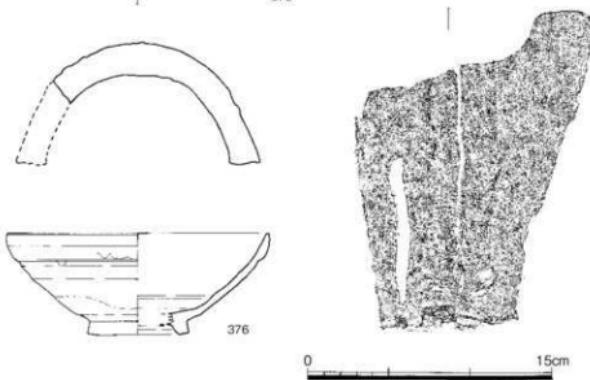
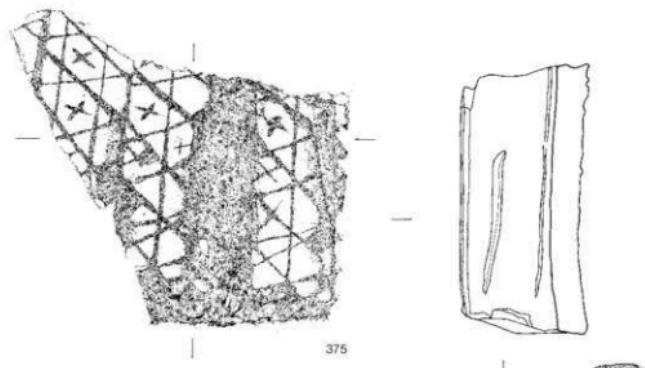
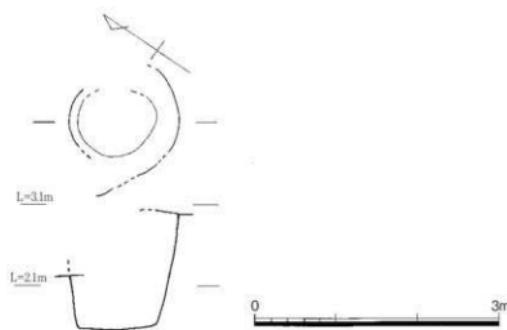


図49 SE 55 および出土遺物実測図 ($S = 1/60, 1/3$)

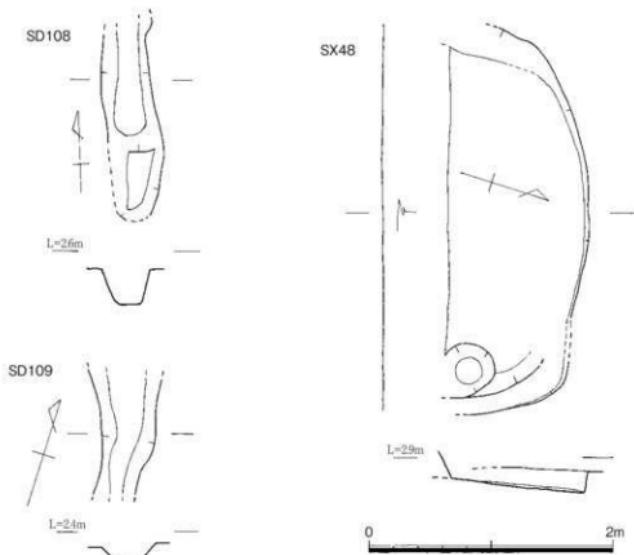


図 50 S D 108・109、S X 48 実測図 ($S = 1 / 40$)

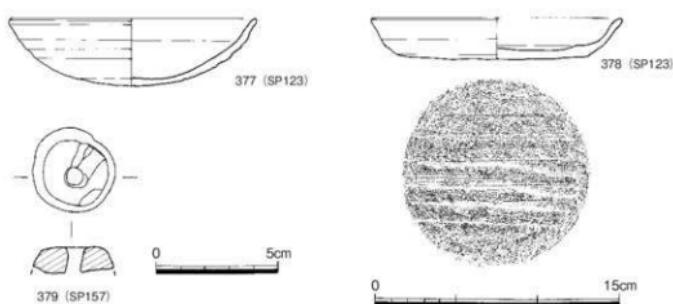


図 51 第3面 S P 出土遺物実測図 ($S = 1 / 3$ 、 $1 / 2$)

溝

2区

SD 108 (図 50、図版 11)

検出長 1.6 m、幅 0.45 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m の南北方向である。

SD 109 (図 50、図版 11)

検出長 1.0 m、幅 0.45 m、深さ 0.1 m の南北方向である。

不明遺構

S X 48 (図 50、図版 10)

1 区西半で検出した。最大長 3.2 m の隅丸方形で、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。

S P 出土遺物 (図 51)

1 区

377・378 は土師器杯・皿で、377 は回転ヘラ切り、378 は回転糸切りで板状圧痕がある。S P 123 出土。379 は滑石製紡錘車である。S P 157 出土。

包含層出土遺物 (図 52 ~ 55、図版 20・21)

1 区第 1 ~ 2 面 (図 52、図版 20)

380 は青磁碗である。381 は白磁小鉢である。382 は染付小鉢である。383 は白磁碗である。384 は青磁碗で、底部外面に墨書がある。385 は朝鮮王朝陶器皿である。386 は明青花皿である。387 は朝鮮王朝象嵌青磁碗である。388 は土錘である。389 は平瓦で、「□左衛門」の刻書がある。390 は敲石である。391 は銅錢の「熙寧元寶」(北宋 1068 年初鑄) で、重さ 3.5 g。

1 区第 2 ~ 3 面 (図 53、図版 20・21)

出土位置は S D 17 を境に、西半と東半に分けて取り上げた。

392 は砂岩製樋で、重さ 71 g。393 は土錘である。394 は黒の碁石である。395 は土師器碗である。以上は西半出土。396 は白磁碗 V - 1 a 類、397 は白磁皿 II - 1 a 類で、底部外面に墨書がある。398 は越州窯系青磁大碗で、底部内外面に目跡がある。399 は白磁皿 III - 1 類である。400 は陶器水注の口である。401 は白磁蓋である。402 は須恵質容器の獸脚である。403 は白磁碗 XIII - 1 b 類である。404 は陶器薬研である。405 は青白磁蓋である。406 は土師器小型壺である。407 は弁辰韓系瓦質土器鉢で、内外面ヘラミガキ調整で、一か所突起がある。外面黒色で厚く煤が付着する。以上は東半の出土。

2 区第 2 ~ 3 面 (図 54、図版 21)

408 ~ 413 は須恵器で 408・409 は高台付杯、410 ~ 412 は杯蓋、413 は大皿である。414 は陶器獸脚である。415 ~ 419 は土師器で、415・418・419 は皿、416・417 は杯である。416 は底部外面ヘラ切りで、コテアテ痕がある。415・417・418 は回転ヘラ切りである。420 は黒色土器 A 類碗である。421 は黒色土器 A 類皿か。422 は黒色土器 A 類碗である。423・424 は土錘である。425 は土師器甕である。426 は須恵器甕である。

2 区①・②第 2 ~ 3 面 (図 55、図版 21)

427 は古式土師器の布留系壺である。428 は須恵器杯蓋である。429 は土師器皿で、底部中央に穿孔がある。430 は越州窯系青磁皿である。431 は越州窯系青磁碗である。432 は朝鮮王朝雜釉陶器皿で、見込み部に目跡が四ヶ所残る。433 は土師器碗である。434 は須恵器器台か。435 は白磁碗である。436 は磁器柄である。437 は施釉陶器碗である。438 は白磁碗で、底部外面に「光造」の墨書がある。439 は白磁碗で、体部外面の下方に花押とみられる墨書がある。440 は碁石か。441 は青白磁合子の蓋である。442 はガラス連玉で、灰白色である。443 は銅錢の「開元通寶」(唐 621 年初鑄) である。444 は龍泉窯系割花青磁碗である。

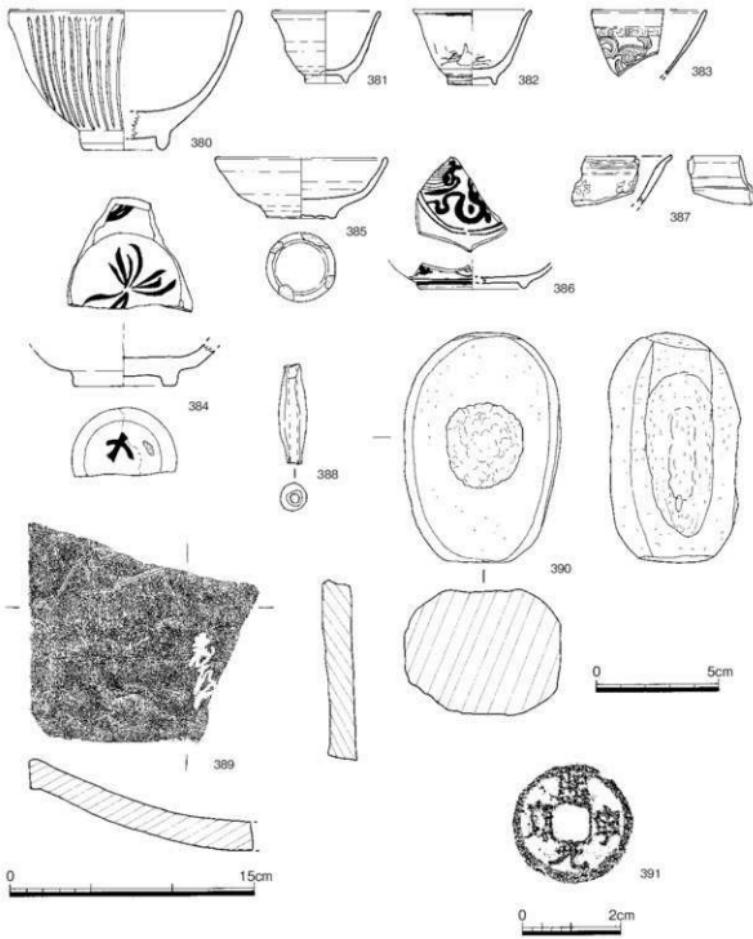


図52 1区第1～2面包含層出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2, 1/1$)

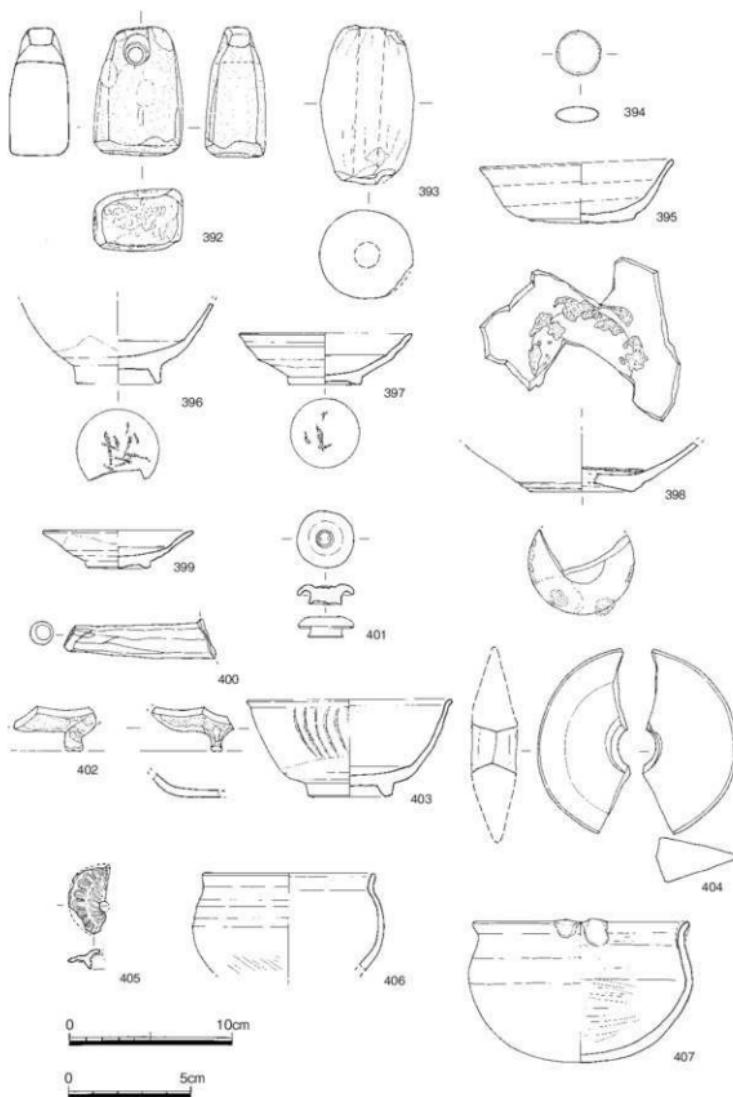


図 53 1区第2～3面包含層出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2$)

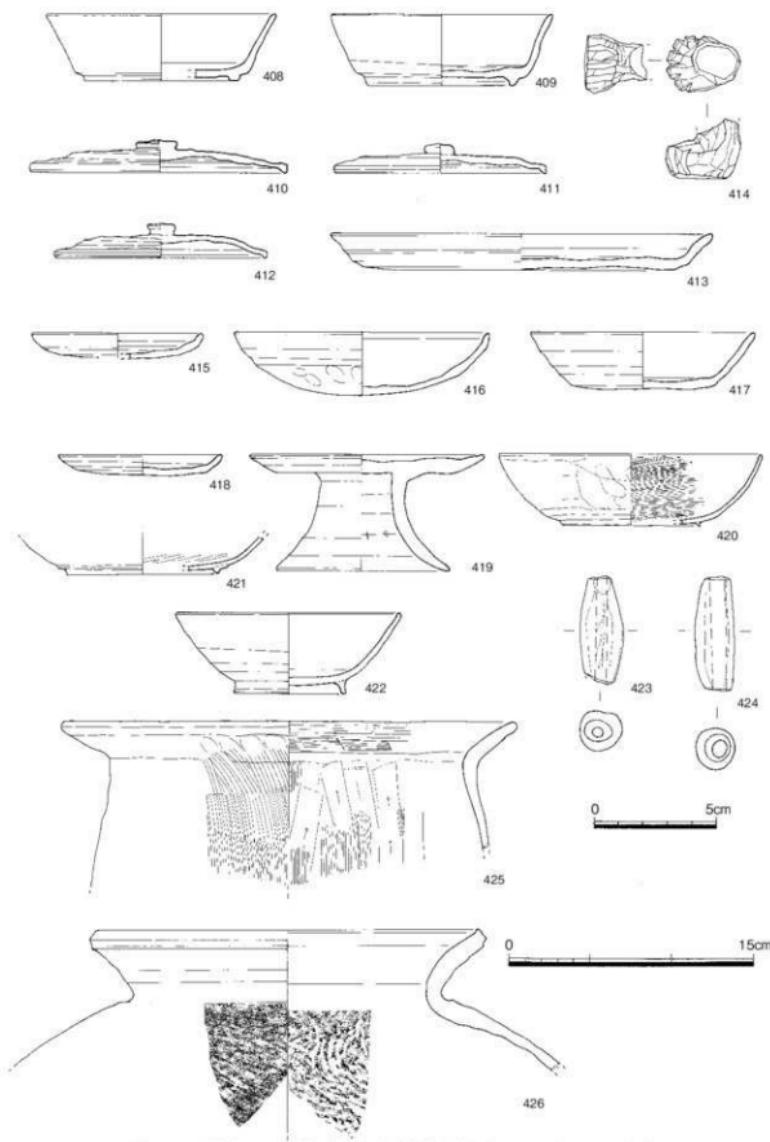


图 54 2区第2～3面包含層出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2$)

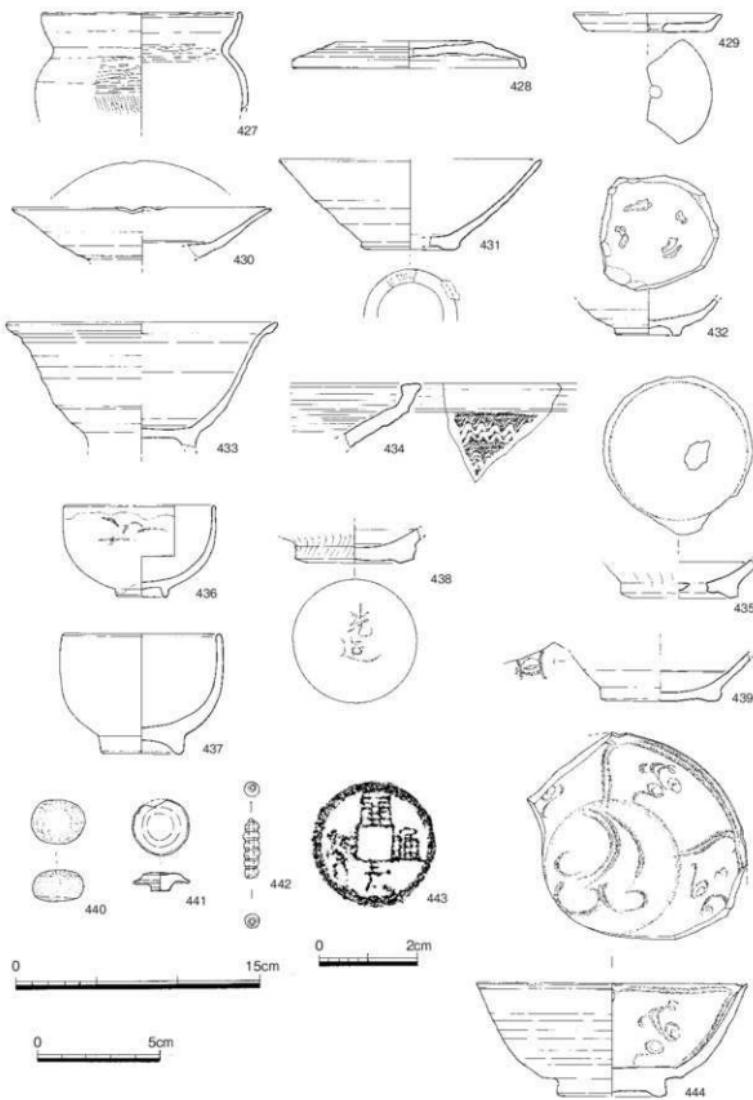


図55 2区①・②第2～3面包含層出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2, 1/1$)

3 まとめ

最後に今回の調査成果について、簡略ながら時代ごとに要点をまとめ、今後の課題・問題点をあげておきたい。

今回は計3面の遺構面を調査した。

第2面は11～13世紀前半、平安時代後期～鎌倉時代前半を主体とする。その中で最も特筆すべき遺構は調査区中央で検出した南北方向の大溝 S D 17である。幅6m、深さ2m弱におよび、その軸線は磁北より10°西偏し、80次調査地点（現博多町家ふるさと館）で検出された溝 S D 40の延長線上に当たる。

博多では那珂川に臨む西の沿岸部、現在の柳田神社から冷泉公園にかけての冷泉町一帯に、16世紀後半豊臣秀吉が施工した太閤町割に基づく現在の町割とは軸線の異なる溝・道路遺構が検出されている。この一帯では、荷揚げの際に不良品を選別したとみられる中国産陶磁器の一括大量廃棄遺構が検出されていることから、博多の「港湾城」で中国商人たちの居住域である「唐房」が存在したとみられている。

80次調査 S D 40は時期が14世紀前半～15世紀前半に比定され、小規模道路の側溝がいくつも切り合ったものとされている。S D 17とは時期が異なるが、博多では古い時代に開削・敷設された溝・道路がかなり後まで影響を与え続けていることが明らかとなっており、影響関係が想定できよう。規模を考慮すると S D 17は港湾区域画の最外郭施設であり、区画割の基軸であった可能性がある。

S D 17は土層断面の観察によると、細かな分層はできず、一時に埋まった可能性が高い。その要因として、中国商人居住域の拡大に伴い役割を失ったと考えられる。

また既存建物の杭列により末端部分が精査できなかったが、S D 17は調査区北壁までは延長していない。この部分が陸橋状になり、出入口となっていた可能性がある。大溝が果たして港湾城を区画する施設ならば、現在の冷泉公園付近に想定される港湾部とその外部の街とをつなぐ場所の可能性が高い。唐房想定地の東側に日本人の集住地が想定されており、この場所を介して行き来していたとも考えられる。

大溝がどのような範囲で造営されていたか現状ではまだ不明であり、以上の考察は仮説の域を出ない。大溝の性格解明は、今後の周辺地域における大きな調査課題となろう。

第3面は博多遺跡群の地山である砂丘面である。この面で検出した遺構は、本来第2面から掘り込まれた中世前期の遺構が多数であり、新たに検出したものは少ない。その中で特筆すべき遺構は、1区東端で検出した土器棺壇 S T 47である。壇の底部の形状から、古墳時代初頭とみられる。この遺構が本調査における最古の遺構である。

第2面から第3面へ掘り下げる際に、包含層から扁平な撮みを持つ須恵器の杯蓋、それに伴う高台付杯身が出土しており、また遺構出土遺物も青磁碗が多く、玉縁口縁の白磁碗、底部ヘラ切りの土師器杯や黒色土器A類碗など11世紀以前に遡る遺物が多くみられる。このような傾向は特に2区において顕著である。

博多遺跡群内では、近年ホテル建設を契機とした大規模調査が多い。周辺地域における今後の調査成績により、今回の調査成果に対する評価がより正確なものになっていくことを期待し、報告を終えたい。

【参考文献】

80次 吉武学編『博多 51』福岡市埋蔵文化財調査報告書 448集 1996

大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編 2008『中世都市博多を掘る』海鳥社

大庭康時 2009『シリーズ「遺跡を学ぶ」061 中世日本最大の貿易都市・博多遺跡群』新泉社

大庭康時 2019『博多の考古学 中世の貿易都市を掘る』高志書院

図版 1



1区第1面全景（南西から）



SK 08 (南東から)



SK 11 (北西から)



SD 05 (南東から)



2区第1面全景（西から）



SK 71 (西から)

図版2



1区第2面全景（南西から）



1区第2面東半近景（北から）



1区第2面西半近景（西から）



SK 15（南東から）



SE 44、SK 16（北西から）



SK 23（南西から）



SK 30（南東から）

図版3



SK 31 (北西から)



SK 32 (北東から)



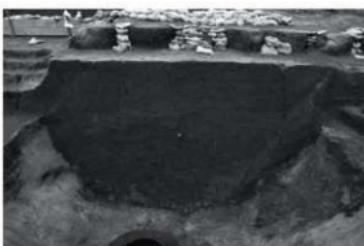
SK 33・34 (北西から)



SE 46 (北西から)



SD 17 (南東から)



SD 17 土層断面 (南東から)



SD 22 (南東から)

図版 4



2区第2面全景
(西から)



2区②第2面全景 (北東から)



2区①第2面全景 (北東から)



SK74 (南西から)



SK75 (北西から)

図版 5



SK 76 (南西から)



SK 77 (南東から)



SK 79 (北西から)



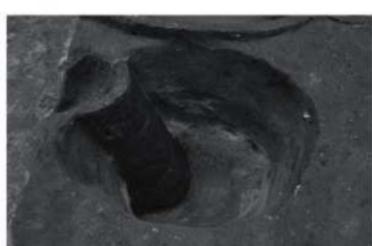
SK 81 (南東から)



SK 82 (南西から)



SK 84 (西から)



SK 88 (北東から)



SK 89 (北西から)

図版 6



SK 95 底板出土状況（北西から）



SK 95 具出土状況（北西から）



SK 95 下駄出土状況（北西から）



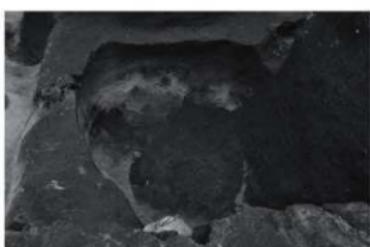
SK 98（北西から）



SK 104（北西から）



SD 17 検出状況（北から）



SE 92（南東から）



SE 92 下層半截状況（南東から）



1区第3面全景（南西から）



1区第3面東半近景（北から）



1区第3面西半近景（西から）



ST 47 検出状況（南から）



ST 47 検出状況（西から）



ST 47（南から）



ST 47（西から）

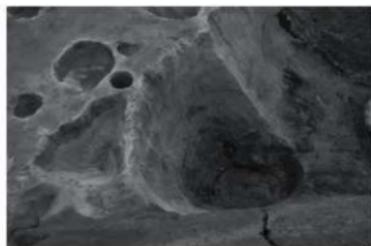
図版 8



ST 47 取り上げ後（南から）



ST 47 取り上げ後（西から）



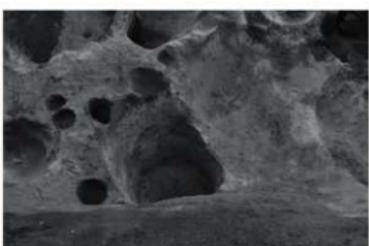
SK 53、SE 40（北西から）



SK 41（南東から）



SK 51・52（南東から）



SE 55、SK 54（北東から）



SK 59・60（南東から）



SK 58・61（東から）

図版9



SK 62・64 (南東から)



SK 63 (北西から)



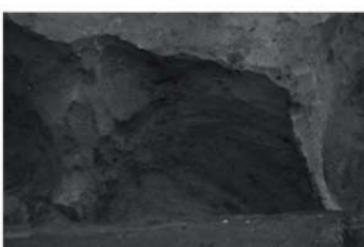
SK 65 (北西から)



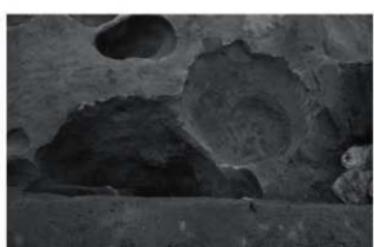
SK 66 (北西から)



SK 67 (北西から)



SK 68 (北西から)



SE 21、SK 29 (南東から)

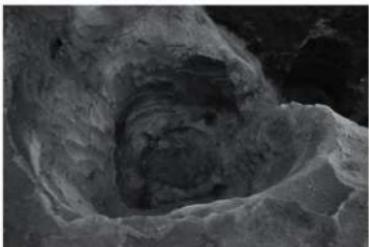


SE 42 (北西から)

図版 10



SE 4 3 (西から)



SE 4 3 井戸側検出状況 (南から)



SX 4 8 (東から)



2区第3面全景 (西から)



2区②第3面全景 (北東から)



2区①第3面全景 (北東から)

図版 11



SK 97 (北東から)



SK 100, SE 101 (東から)



SK 105 (南東から)



SD 108 (東から)



SD 109 (南東から)



SK 110 (南東から)

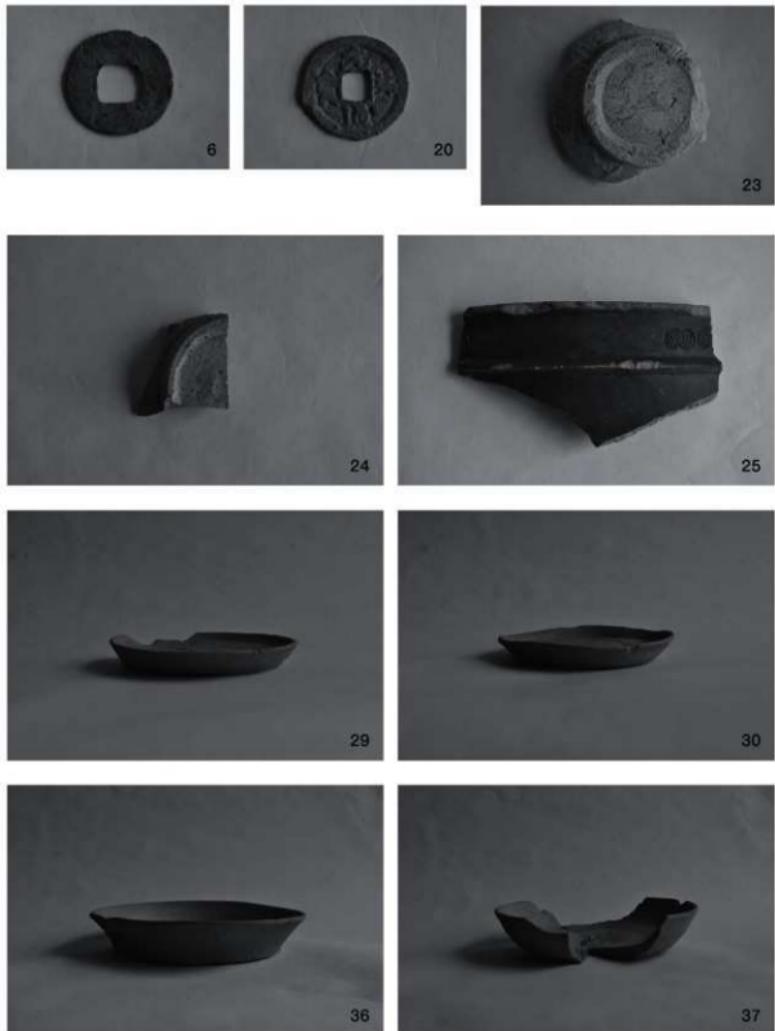


SK 91 + 111 (北西から)



SD 107 + 94 (北西から)

図版 12



出土遺物 1

図版 13



52



57



70



77



81



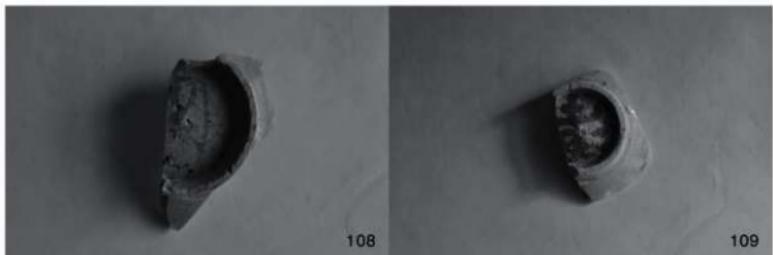
82



100

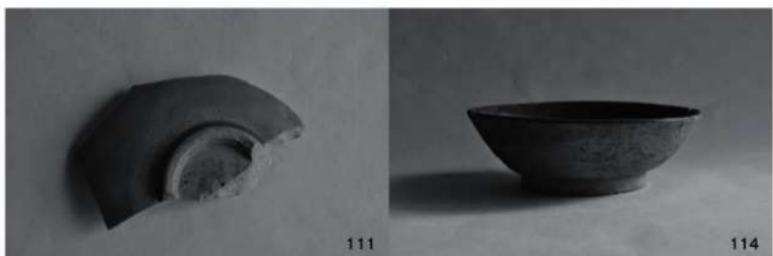
出土遺物 2

図版 14



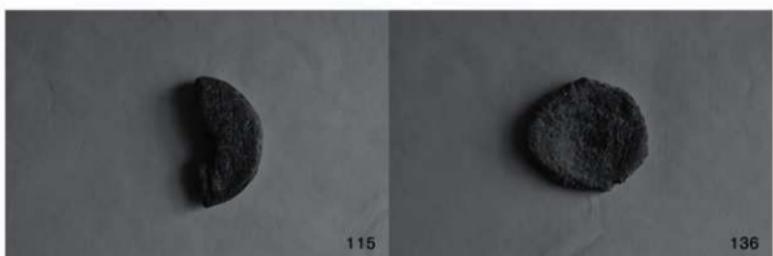
108

109



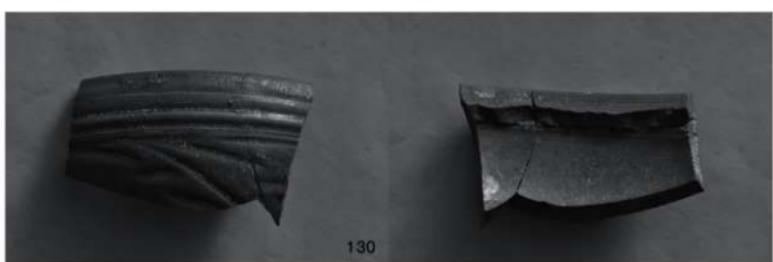
111

114



115

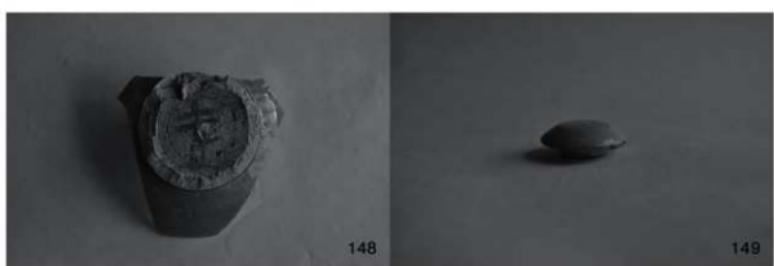
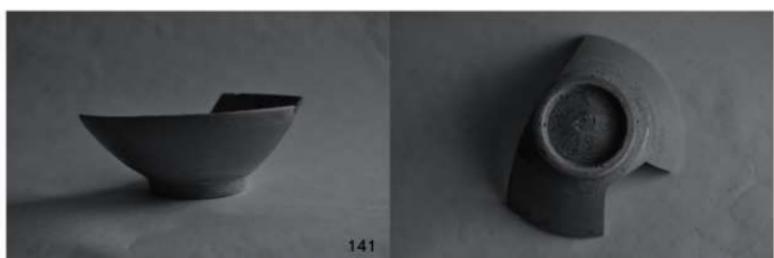
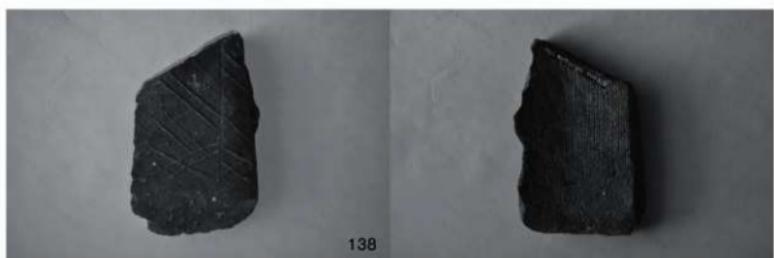
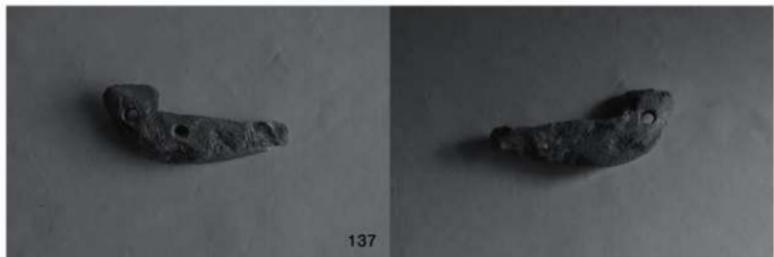
136



130

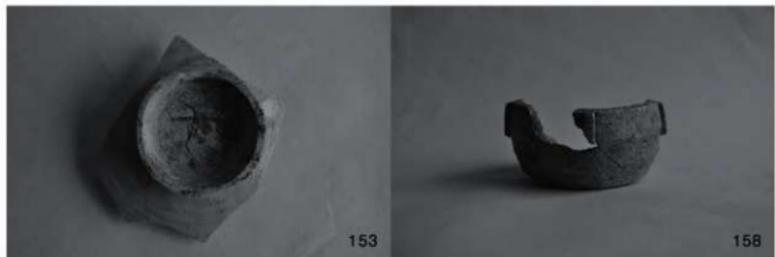
出土遺物 3

図版 15



出土遺物 4

図版 16



153

158



167

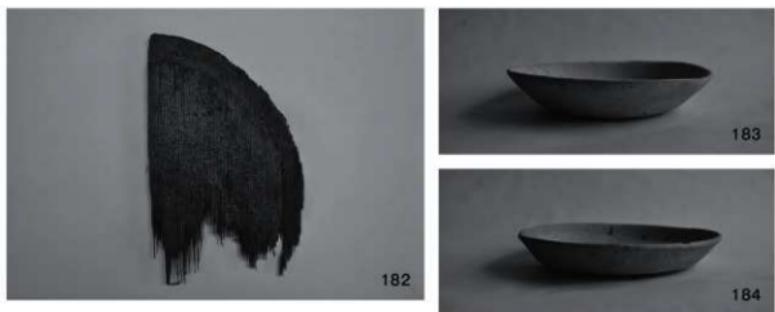
168

169



173

181



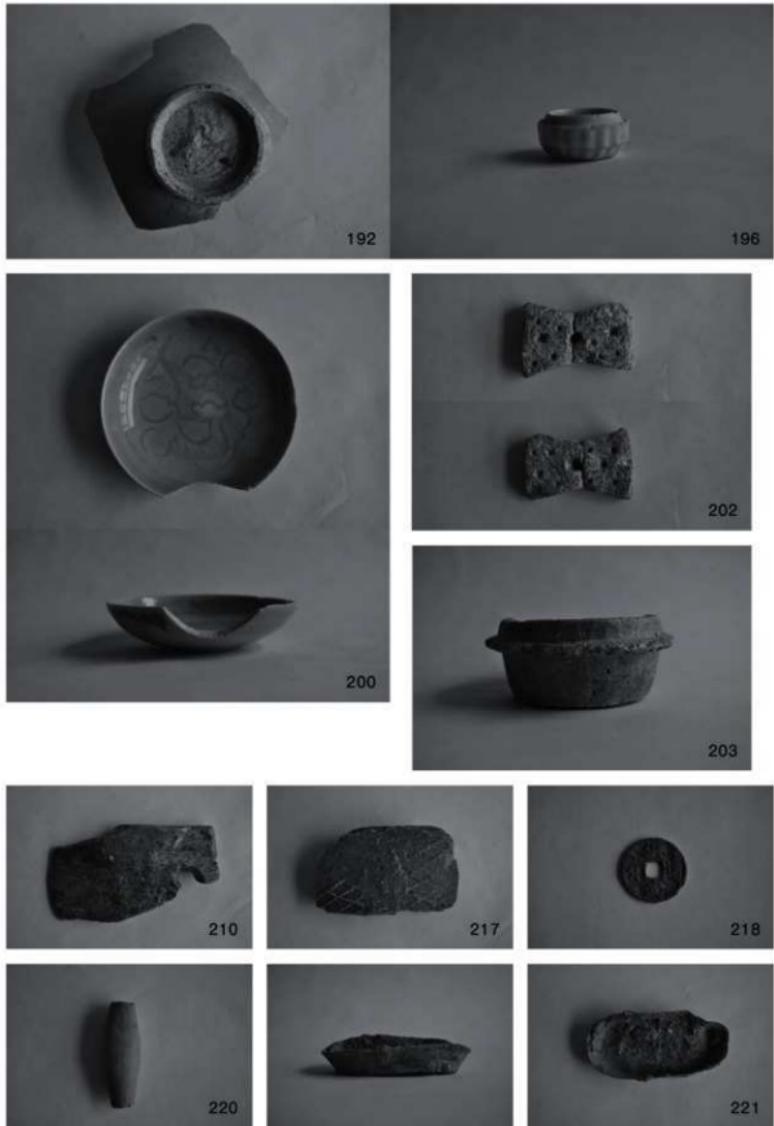
182

183

184

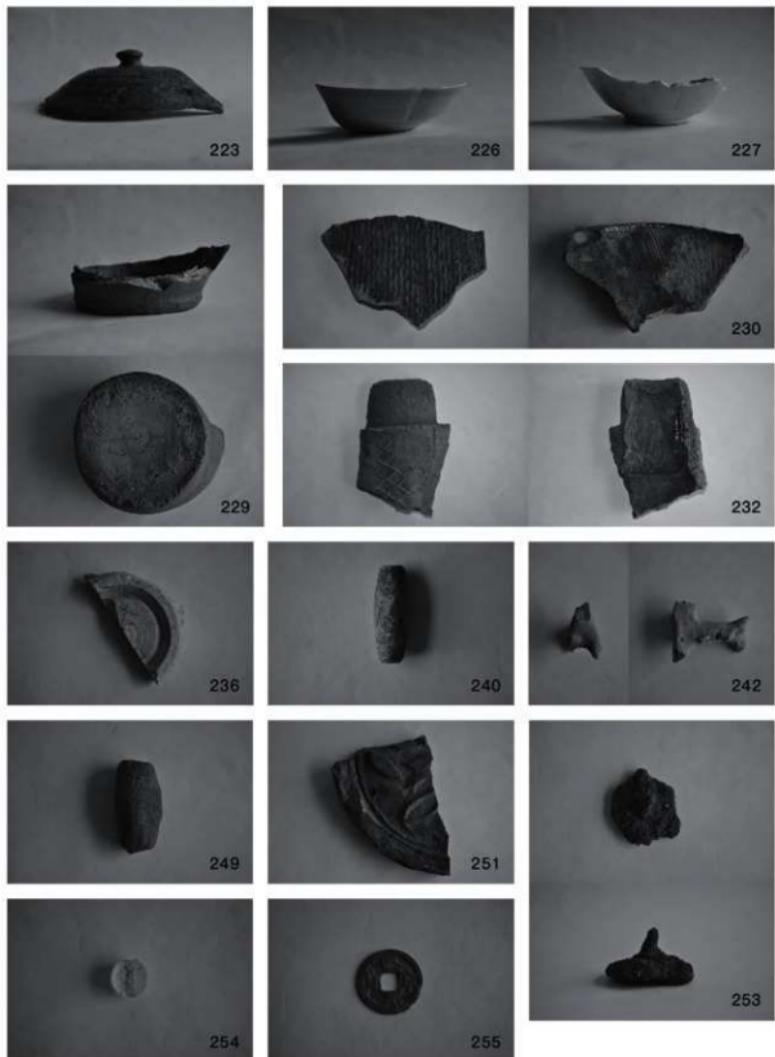
出土遺物 5

図版 17



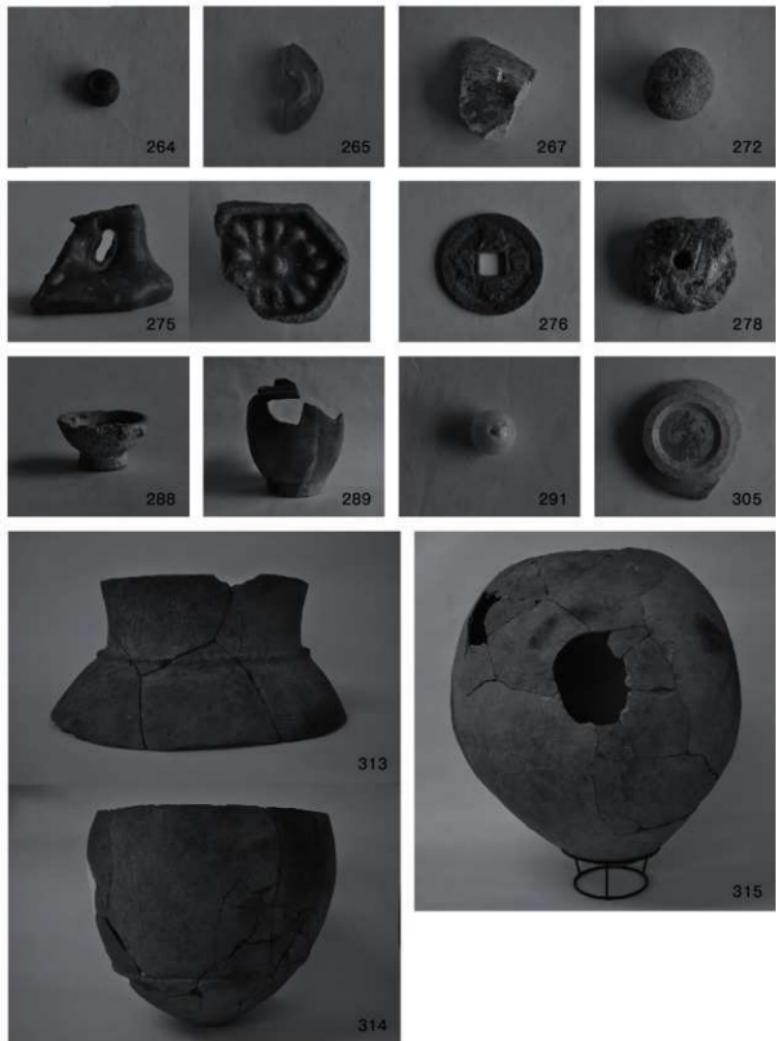
出土遺物 6

図版 18



出土遺物 7

図版 19



出土遺物 8

図版 20



329



331



337



338



340



354



366



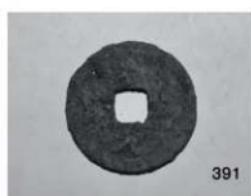
375



380



389



391

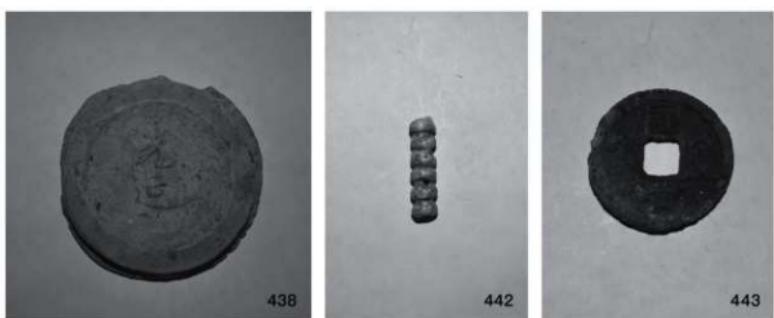
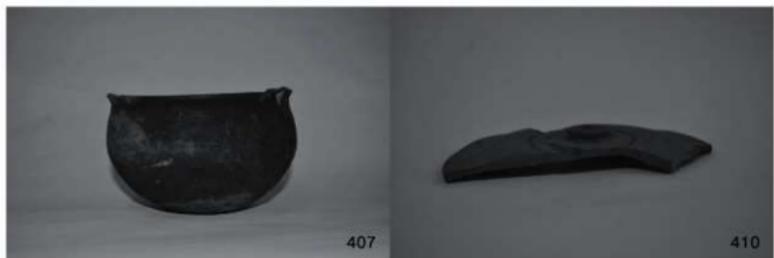


392



404

出土遺物 9



出土遺物 10

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多 174						
副書名	博多遺跡群第223次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第1417集						
編著者名	木下博文						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2021年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群 第223次	ふくおかしきはかたくわいせんまち 福岡市博多区冷泉町 389他4筆	40132 0121 42.22秒	33度 35分 38.97秒	130度 24分 20190422	20181101 ~	465	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群	集落跡	弥生～中世	土器棺墓、井戸、 土坑、溝、柱穴	土師器、須恵器、 中国産陶磁器、 石製品、金属製品			
要約	<p>博多遺跡群は、博多湾に面した3列の東西方向の砂丘上に立地する。今回の調査地点は、遺跡の南西部に位置し、内陸の砂丘の西側頂部付近にあたる。近隣地で162次、186次調査が実施され、弥生時代終末の甕棺墓、古代の東西方向の大溝などが検出されている。今回の調査では計3面の調査をし、第2面では古代～平安時代末期の井戸・土坑、中世初頭の大溝を検出した。大溝は幅6m余り、深2mで、磁北からやや西偏した南北方向である。</p> <p>それらの遺構から、土師器皿、中国産陶磁器、中国製銅錢、土鍤などが出土している。第3面の砂丘面では古墳時代初頭の土器棺墓1基を検出した。出土遺物の総量はコンテナ119箱におよぶ。今回発見の大溝は、博多の港湾区域画の基軸であった可能性があり、博多の町割りの変遷を考える中で今後検討を要する貴重な事例といえる。</p>						

博多 174
- 博多遺跡群第223次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1417集
2021（令和3）年3月25日
発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1
印刷 國崎美峰堂
〒812-0053 福岡市東区箱崎1-20-5

